
大魔法使いの弟子～夢寐の章

里奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔法使いの弟子―夢寐の章

【Nコード】

N7631B

【作者名】

里奈

【あらすじ】

とある古風な田舎町に住む、まだ少し幼い少女のお話です。彼女の先生は大がつくほどの魔法使い。大好きな先生の下で、少女も日々魔法使いとしての修行を積んでいます。そんな平和な日々にある日突然、見慣れない男の子の姿が見え隠れしはじめて……。

プロローグ

その瞬間、世界が、大きく開けた。

街外れに広がる、美しい森。その奥に隠されていた、意外な世界。そこでは、天から降り注ぐ光を存分に受けて、大きな桜が、沢山の花を咲かせていた。

しかし、平野に咲くそれは、春の桜ではなく、

「コスモス……」

ぽつりと。コスモス畑に足を踏み入れた少女が、胸に手を置き、呟いた。

白いフリルの愛らしい漆黒のワンピースがよく似合ったその少女は、自慢の栗色の長い髪をくるり、くるりと指先に遊ばせながら、ゆつくりと、平野の奥へと足を進ませる。

どこまでも広がる、コスモス畑。咲き乱れる、秋の、桜。

土緑色の茎から、幾つも幾つもの伸びている深緑の葉が、まるで、高台から見える、海の、煌めきみたいだね。……なんて言ったら、言い過ぎかもだけど。

太陽の光にきらきら、とっても、綺麗。

緑の絨毯の上に、鮮やかな花飾りが添えられて。風に揺られて、楽し気な香りが漂う。

心が、まるで踊らされるかのよう。

「えへへ……っ、」

まさかこんな所に、こんなステキな場所があったなんて。

美言みことつたら、凄い発見しちゃったもんねっ！ と、少女は少しだけ悪戯っぽく、黒い瞳を輝かせた。

深緑の海に、美言の姿が溶け込んでゆく。

また秘密が、一つ増えちゃったもんねっ。

美言がこの月代つきしろの街に住み始めてからは、もう五年の歳月が経つ。彼女の愛するこの街の秘密は、美言の中にいくつも秘められて大切

に隠されていた。

一面の桜。一面の秋の大きな桜。

世界に、白色フリル模様の黒い花が一輪、ふわりと咲いた。緑の海に舞う桜の花弁の中で、ワンピースを風に遊ばせた美言が、くると笑顔の花を開かせる。

ねえっ。

白いコスモスの花言葉は、美麗、純潔、優美っ。ねえ、美言にピッタリな花言葉じゃない？

美言の指先に触れられて、白い桜が優雅に頭を下げる。

ピンクは、少女の純潔ねっ。

美言は高いんだもんねー、と話しかけられて、ピンクの桜が苦笑する。

それから、紅は、調和に、愛情っ！

じっと見つめられた紅い桜が、美言を静々と見つめ返す。

「ほんつとくに、綺麗……」

くすくすと笑いながら、コスモスの間を、花から花へと飛び回る。ねえ。知ってる？

誰にとも無く、問いかける。

オトメには、秘密が、たーくさんっ。ね、この場所は、誰に教えてあげようかなっ。

秘密はね、大切な人に、こっそり教えてあげるの。秘密は、大切な人として、共有できないもんねっ。

だから。

今度先生の体調が好い時に、一緒に、ピクニックに来ようかな。

「そうしたら先生、喜んでくれるかなあ」

秋桜の海を、風が天へ向かって駆け昇って行く。

そのくすぐったさに促されるかのようにして、美言は、青く高い空を見上げて、更に微笑を深くした。

第1章 - A

小さな、石造りの家の、とりどり色の花の散る庭では、今、一人の少女と、一人の青年とが、穏やかな時間を共有していた。

甘い香り。この庭に咲き乱れる花々は、少女が大切に大切に育ててきた、季節の花々。まるでこの街の外れにある森を小さくしたかのような空間では、時もゆっくりと、足音をたてずに過ぎ去って行くかのようで、秋の風さえも、二人を包み込むかのような、優しく、暖かいものであるかのように感じられた。

そんな、少女曰く、まるで絵本の中を再現したかのような世界の中で、

うーん……。うーん、と。

唸る少女　美言は現在、二つに折れた枯れ木を片手ずつに、

「うー……、」

「頭の中で、パズルを組み立てるんですよ。……ほら、力を抜いて

……、」

「うーっと……あー……、」

必死になつて顔を顰め、とにかくにも、目の前の課題をやり遂げて見せようと、彼女にしては珍しく、忙しなく頭を働かせている最中であつた。

美言が、こうし始めてから、既に数十分が経過していた。

「そんなに力んでもダメですよ？　美言？」

その後ろから、長閑な声音が、彼女に向って微笑みを向ける。

声の主は、彼女の師である魔法使い、ルーカスであつた。見目、精々二七歳くらいの、青い瞳の白人の青年。彼は、庭に備え付けてあつた小さなベンチに腰掛けたまま、膝の上に開いた分厚い本を、一頁だけひらりと捲ると、

「力押しでは、無理ですからね」

視線は文字を追わせたまま、しかし心は美言に向けて、小さな弟

子に魔法の手解きをする。

「わかってるけど……」

「それに、あまり考えすぎると、かえってこんがらがってしまいますよ？ 時には、一息置くことも重要です」

今、美言がやり遂げようとしていることは、二つに折れたこの枯れ木を、元の一本に戻すということであった。

茶色の木の皮からはみ出す白いささくれに、美言はじっと睨み顔を近づける。

……どうして、できないのかなあ。

先生だったら、粉々に割れたティーカップくらい、あっさり直せちゃうのに。

なのに美言は、こんな簡単なこともできないんだよなあ……と、改めて師の偉大さを噛み締めると、美言は更に、枝を視界に近づけた。

美言は、早く先生みたいになりたいのにな……。

力一杯願えども、やはり、二つの枝は、元に戻ってくれようとはしなかった。

自然と、更に体に力が入ってゆく。

小さな手によって握られた枝が、小刻みに震え出す。

「美言。……ほら、深呼吸して」

ひらり、と、また一頁、ルーカスはそつと本を捲り、焦つても、ダメですよ」

美言は、頑張り屋さんですからね。

でも、時に、美言は頑張り過ぎですものね、と、心の中で付け加え、ルーカスは眼鏡をそつと押し上げた。

もはやこの少女との付き合いも、五年ほどになるのだ。

家族の考えることなど、それなりにわかってしまう。

ねえ、ですから美言、

「今日やめることは、諦めることにはならないんですから」

また明日でも明後日でも。できるまで、やめなければいいではあ

りませんか。

急ぐ必要はありませんよ、と口元を緩めると、ルーカスは更に、一頁本を捲った。

それから、暫く。

美言の唸り声が、草木の靡く音に、何度か交じり合った後。

「やつぱり上手いじゃないやつ」

降参つ。と頬を膨らませて、両手にある木の枝を交互に見遣ると、美言は残り全ての未練を溜息に代えて、外へと吐き出した。

まあ、いいや。先生もああ言ってるし。ね。

とりあえず今は、そう自分に言い聞かせる。

「まあ、今日はこの辺にしておくのも、いいと思いますよ。そんな急に、色々とできるようになるわけでは、ないのですからね」

ほら、先生の言う通りだよ、ね、美言？　美言、今日も頑張ったじゃない。

だから今日はおーしまいっ、と、左手の枝を右手に渡すと、美言は軽い足取りでルーカスの元へと駆け寄った。

「やつぱ、難しいねっ。立派な魔法使いになるって」

「とか言いながら、美言は本当に成長が早いんですから。あなたは早くも、ちよつとでも空を飛べるようになっているみたいですからね。……大丈夫です。ご安心なさい。美言になら、ちゃんとして、誰かを助けることのできる魔法使いになれますよ」

誰かを助けることのできる、魔法使い。

そうなるために、美言が日々、努力していることを、ルーカスはよく知っている。

「そうかなあ……こんなんで美言にも、本当に、先生みたいになれるの？」

こんな簡単なコトも、満足にできないのに？

「ええ。安心してください。美言はきつと、私を超える魔法使いになれると思いますよ？」

何せ、志が違いますからね。

魔法の力は、意思の力に左右されるものなのだ。当然、一流の魔法使いになるには、生まれつきの能力、というものも必要になるのだが、その成長の度合いは、魔法使いとしての実力は、彼等の意思によって決まってくる。

私は、そういう意味では、大した志も理由も意志も無しに、成り行きで、魔法使いになりましたけれど。

でも、美言は違いますしね、と、本を閉じると、自分の横にそれを置く。

その本の代わりに、抱きついてきた美言を、膝の上に乗せた。

「どうして、そんなことが言えるの？」

「どうしてもこうしても、美言を見ていると、そう思ってしまうからです」

今から、一年と少し前であつたか。ルーカスが、五年前に出会つた彼女に、魔法を教え始めたのは。

それまでは様々な事情が重なり、ルーカスが魔法使いの師として美言に接することはあまり無かつたのだ。ルーカスはただ、美言の親の代わりとして、時として最も理解ある友人として、彼女に接するのみであつた。

しかし。

「結構いい加減なんだね？ 先生も？」

「そうですね？ それでも何となく、そのような確信がありましたね」

二年ほど前のとある事件の後から、ルーカスは美言へと、こうして魔法を教え続けている。

とある事件　魔法が誰かのために使われることなどない、魔法使いが誰かの役にたつはずなどない、と考えていたルーカスの考えが、根本から引っくり返された事件。

ルーカスは確かに、一流の魔法使いであつた。それも、魔法使いの世界の中でも、類稀なる才能を持つ者にしか与えられない、大魔導師の称号を持つ魔法使い　尤も、ルーカスが魔法使いの世界か

ら身を遠ざけてからは、かなりの年数が経っているのだが、それでも魔法使いの間では、ルーカスは数世紀に一度にいるか、いないか、とされるほどの、希代の大魔導師として有名なのだ。

「美言もちゃんと、先生みたいな、立派な魔法使いになれる？」

先生みたいに人の役にたつことのできる、立派な魔法使いになれるのかなあ。

ぽつり、と付け加えたところで、

「……私は別に、誰かのために魔法使いをやっているわけでは、ありませんよ？」

「でも、先生は優しいからっ。優しい先生が魔法を使うと、誰かのためになるんだよ、ね？　だって美言は、先生にお礼しに来た人達、沢山知ってるもん。先生に、助けてもらったんだって、皆笑ってた。美言ね、その笑顔を見ると、本当に嬉しくなっちゃった」

「それは、結果論ですよ。私は最初から、人のためになるうと思っ
て、魔法を使っただけではありませんからね。……それに、」

それに、

「魔法は、」

「万能なものじゃない……でしょ？」

師の言葉を先読みして、美言は更に強く、ルーカスの首筋に抱きついた。

暖かい、ぬくもり。大好きな人の、腕の中。

ほっと、全身を抱きしめる安堵感に溜息を吐き、

「わかってるよ。命を持つものには、魔法は使えない……魔法じゃあ、怪我とか何とか治せるわけじゃあないし、病気だって治せない。時間だって、いじれない……美言達にできるのは、そこにある”モノ”に、ちよっと干渉することくらいだもん」

「さすが、よく勉強なさってますね」

「先生の口癖でしょ。もう覚えちゃったもん」

この世界の魔法使いは、御伽の国の魔法使いとはわけが違っ。魔法使いは、決して万能な存在ではないのだ。それはルーカスが美言

に、散々言い聞かせていることの一つでもあった。

魔法とはこのようなものなのだと、かつて師が、美言に説明して聞かせたことがある。魔法を使うことは、ある意味数式を弄ることに等しいのだと。”モノ”を構成する”数式”に手を加えることによって、その”モノ”を変化させることができる存在が、魔法使いなのだ。

「それに、”モノ”を元に戻すこともできない、だよな？」

ただしその”数式”は、インクで書かれている。魔法使いにとつて、一足す一と、三引く一とは、全く別のものなのだ。答えは同じでも、そこに書かれている”数式”が違う。この”数式”の違いこそが、”モノ”そのものの本質を表しているのだから。

「美言達は、一足す一って”モノ”から一が引かれて、一足す一引く一ってなったものに一を加えて、元の二って答えに戻すことはできても、元の一足す一っていう式に戻すことは、できないんだよね」「ええ、その通りですよ」

だから魔法使いには、何かを元に戻すということも、できないのだ。元に戻したように見せかけることは、可能であったとしても。「でもね」

苦笑する師から少し身を離し、くるりと半回転した美言が、彼の膝の上に腰を落ち着ける。

先ほどまでは彼女を受け止めていたルーカスの手を、美言はいつものように手にとつて弄つて遊びながら、

「たとえそういう制約に縛られて、先生にできなかったことがあったとしても、だよ？ 先生の魔法のおかげで、幸せになった人が沢山いるってことに、変わりはないんだもん。先生は、先生の力で精一杯できることを、いつもやって来たんでしょ？ だったら、それでいいと思うの」

美言は、知っているのだ。自分の師が、自分の能力の限界に悩み、苦しみながら生きてきたことを。師が、周囲から寄せられた期待に、時に応えられない自分を、責めてきたであろうことを。

……先生は、優しい人だもん。

ルーカスが自分の魔法の力を、中途半端に人より秀でた能力として 自分にこのような中途半端な能力さえなければ、助けようなど考える必要も無いような状況に置かれた人々を何度も見てきて、時に恨んできたであろうことが、美言には手に取るようによくわかる。自分の能力によつて、この他人には無い能力によつて、助けられそうな人々を、しかし、様々な制約によつて助けられなかったことを、彼はどんなに悔やんで生きてきていることなのだろう。「知恵は、力なり。ね？ 道具は、多い方が好いよ。魔法だつてきつと、何かのためになると思うの。美言はね、折角こういうことができるんだから、美言にしかできないことをやりたいの。そうすれば、美言、先生みたいになれるかな、つて思うから」

届きそうで、届かない。助けられそうで、助けられない。そんなもどかしい想いと、自分は世界でも指折りの魔法使いである、という否定のしようが無い事実との間で、ルーカスは今でも、時折悩むことがあるに違い無い。

「美言はね、先生のこと、ほんつとくに尊敬してるんだもん」

美言はね、誰かを助けることができる、魔法使いになりたいの。最初は、美言の理想を、そのようなことは無理なのだ、魔法使いとは人を助けるために存在しているのではないのだから と嗜めていたルーカスの言動は、きつとそのような、ルーカス自身の人生経験に因るものなのだ。

だけど。

「ね、美言だつて、先生に助けられたヒトの一人なんだよ？ 美言は先生に助けられて、とつても嬉しい……だから、こういう喜びを、他の誰かにも分けてあげたいなあって、思うの」

五年前、イタリアの地で、両親を亡くした美言を引き取ったのが、他でもない、ルーカスであった。

美言が、愛してやまない両親無しにここまでやってこられたのは、美言が思うに、ルーカスという存在がいたからこそであった。

「先生」

木の枝を自分の膝の上に置いて、美言は両手で、師の大きな右手を取った。

まるでそこから、ルーカスの、優しさが伝わって来るかのようで、美言は思わず、えへへっ、と笑うと、

「先生、美言はね、ぜーんぶをひっくるめて、先生のことがだーい好き、だよ」

ルーカスは苦笑気味に、しかし、左手でそっと、美言の手を包み込むと、

「……ええ」

頷いた瞬間、甘い香りが印象に残る。花を愛する少女からは、いつも、自然の優しい香りがする。

五年前までは知らなかったはずのこの少女が、今やルーカスにとって、心の支えとなっていた。美言の笑顔を見ているだけで、例えば落ち込んでいる時も、気持ちが晴れやかなものになってくる。

傍にいただけで、いつも心のわだかまりを、解いてくれる娘のような存在、否、ルーカスの娘。

こっん、と寄りかかってきた彼女の暖かい重みに、ルーカスはそっと瞳を閉ざした。

「私もあなたに、助けられているんですよ。……美言の笑顔は、とびきりの魔法ですからね」

皆を、元気にしてくれます。

それだけで美言は、まず一つ、人のためになる魔法使いとしての仕事をしているんですよ？ と耳元でそっと付け加えると、美言はくすぐったそうにして、宙に足をばたつかせていた。

第1章 - B

箒で空を飛ぶなんて、まるで魔女さんみたいじゃあない？

少し小さめの竹箒をわざわざ街で買い出して、初めて空を飛ぶ練習を始めた日、少女は、気合十分、師に向かってその箒を掲げ、にっこりと笑って見せた。

今日から、空を飛ぶことを教えてくれるんでしょ、先生？ それじゃあほら、雰囲気って、大事だと思うんだもんっ。いつかは、ワルプルギスの夜に行くのっ。……なんちゃってっ。

大魔法使いの、小さな弟子。否、もはや彼女が一六歳ともなれば、小さな、といってしまっっては、語弊があるのかも知れないが、「とーべーとーべー とーべー」

今、彼女は 美言は、その箒に跨り、楽し気に即興の歌を歌いながら、のたりくたりと街外れの森の細道を進んでいた。

魔法使い。

この世界においては、迷信と信じられている存在。科学や化学の発展により否定された、或いは、科学によつては説明できない、不思議な力を持つとされる存在。

現代にも魔法使いが存在し、彼等は今もこの世界の、或いはこの日本のどこかで生きているのだ、などという話など、世間一般からは夢物語だと一蹴されてしまっただけで当然なのかも知れない。

しかし、現に、

「もつとはやくー。先生みたいにっ だから君も、頑張っつっ」

少女の足は、彼女の影から離れているのである。道の先へ、先へと、進み行く美言は、まだ名前をつけていない相棒の箒に跨ったまま、両足をゆらりゆらゆら遊ばせていた。

秋の気配が、舞い踊る季節。時折、乾いた音をたてて流れて行く枯葉も、地面を彩る気品のある色の花々も、つい先日までは、なかなか見られるものではなかったのだ。

森の緑を揺らす涼しい風が、美言の長い髪をきららに遊ばせる。フリルの目立つ、もしここが都会であれば、その景色から浮いてしまうようなワンピースが、ふわりひらりと風に流されていった。美言はこうして、誰にも見つからないように、密やかに、日々、魔法の練習に励んでいる。

美言も早く先生みたいな魔法使いになりたいなあ、と、美言の小さな手が、箒の柄をきゅっと握る。

美言の尊敬する先生は、それは、それはすごい先生で……。

美言は、やっぱり先生のことだーい好きだもんっ、と心の中で呟き、美言はえへっ、と微笑を浮かべる。

だから美言は、いつか師のような偉大な魔法使いになって、沢山の人を助けることができればいいのになあ、と、そう考えているのだ。

きつとまだそんな日は遠いだろうけど、毎日毎日、少しずつでも頑張らなくっちゃ。

ついこの前までは空なんて飛べはしなかったのに、

ほら、美言だって、今日はきちんと空を飛んでるよ。……まあまだ、これ以上高くも速くも飛べないけどねっ。

精々、道の脇に並んでいる少し背の高いキノコを掠めるくらいの高さしかない所から、森の緑に視線を廻らせて、さあ、と一つ気合を入れる。

大丈夫。ゆっくりだけど、段々できること、増えてるもんっ。

だから今日も頑張らなくちゃっ、と、美言は顔を上げ、この先に長く続く道を真っ直ぐに見据えた。

「飛べとーべ　もっと速くっ、それから、もっと高く飛びたいなっ」

そうしたら、先生も、さすが美言ですね、って、褒めてくれるもんねっ。

更に足をばたつかせる美言の楽しい歌に、草も花も、一緒になっ
て歌い出す。

と。

唐突に。

美言のすぐ横に咲いていた花の揺れる音が、心に引っかかって、離れなくなったような気がした。

美言ははっとして、音をたてないようにと地面に足を下ろす。

そこで改めて、その花をじっと見遣った。

どしたの？

無言のまま、問いかけた。相手は人ではないけれど、言葉を持たない花だけ。

でもこのコスモスさんったら、何かを美言に、伝えたがってるような気がして……。

少し背の高い紅いコスモスが、たった一輪。

美言が花の傍まで歩み寄り、そっと腰を屈めたその瞬間のことであつた。

規則正しい間合いの足音が、美言の方へと、近づいて来た。

美言は立ち上がり、道の向うへと顔を向ける。

右手に持った箒を地面に突き、一つ瞬きをした。

そこに、

「あ……、」

人の影が、見える。

段々と近づいてくるその人影は、どうやら美言より背も年も大きな、青年のように見受けられた。彼は何かを胸に抱え、しきりに森を見回していた。

やがて、その青年も、美言の姿に気がついたようであつた。

ふ、とその場に立ち止まり、美言をじっと見つめてくる。

美言は戸惑いがちに、一步を踏み出した。

「……あの、」

しかし、声をかけられても、青年は彼女へと、応えようとはしなかった。

ただ、急に出会ってしまった小さな しかもなぜか、こんな場

所で箒を手を持った、随分と時代錯誤な恰好をした　少女を見つめ、黙っているばかりであった。

美言も美言で、冷めた瞳を向けられて、気まずさに、身を引きたい思いで一杯になっていた。

それでも、何とか自分を奮い立たせ、

「こん、……にちは」

ぎこちなく、挨拶をして頭を下げた。

非常に、珍しいことであった。この森で、自分の住む月代という名の異人街で、普段見かけない人を見かけることなどは。

だって、街の人でさえ、こんな場所には滅多に來ないのに……。

だからこそこの場所は、美言が魔法を練習するのにはうってつけの場所でもあるのだ。誰にも見つかつてはならないことを、やることができる場所であるがゆえに。

「……やあ」

暫くして、ようやく青年が、美言の箒から視線を逸らして、無愛想に短い挨拶を返してきた。

そこで初めて反応を返されたことに素直に喜んだ美言は、

「君、月代の人？　見かけない顔、だよな」

箒を持ったまま手を打ち、背の高い青年を見上げて、問いかける。その質問を受け、青年はどこか怪訝そうに瞳を細めると、

「関係無いだろ」

くるり、と踵を返して、美言から遠ざかって行ってしまう。

美言はその背を、慌てて追いかけると、

「確かに関係無いけど。だってこんな所に、人なんて滅多に來ないんだよ？」

「だからどうしたって言うんだ……」

「別に、だからどうしたってワケじゃあないけど。何か、探してるの？」

「別に」

青年の歩く速度は、美言にとってはあまりにも速すぎる。

美言は時折小走りをしつつ、ようやく青年の横に並びながら、
「ねえ」

冷たい人だなあ……本当に。

思いながらも、どうしてか構わずにはいらなかった。

不思議な、人。

何となく、そんな印象があった。美言の友人の中にも、このような雰囲気を持つ男子は一人もいなかったように思われる。

気のせいかも、知れないけど。

美言には、彼の言葉は冷たくとも、彼が心まで冷え切った人であるように思われなかった。それどころか、どことなく、暖かい雰囲気さえ感じられるような気がしてしまつて。

ちよつと、ねえ。……立ち止まつて、少しは話でもしてくれたつて、いいじゃない？

美言はね、君がどういう人なのか、ちよつと、知りたいよ？

こんな所で出会えるなんて、何かの、縁だよ。

「ねえつてばあ」

「煩いな。黙つて」

答えた青年が、唐突に足を止める。

やつと応じてくれたつ、と、美言がねえ……と話を切り出そうとした頃には、青年の意識は、彼が手に持っていたスケッチブックへと移されている。

青年は白紙のページを開くと、右手で鉛筆を立てて目の前に掲げて見せた。

「何やってるの？」

問われても、しかし、青年は答えない。

彼は、さながら美言などその場にはいないかのようにして、ほつと一息を吐き、スケッチブックに一本の線を入れる。

……ねえ。

言いかけて、美言は口を噤んでしまった。

何となく、邪魔をしてはいけないような気がしたのだ。

今や彼は、彼の回りに、彼にしか入り込めない彼だけの世界を造り上げてしまっている。美言には、そう思われてならなかった。

青年はそのまま、静かに腰を折ると、スケッチブックを膝の上にして、目前に広がる世界と、白紙の世界とを、交互に見遣っては鉛筆を軽いタッチで震わせていった。

美言も箒を片手にしたままその斜め後ろに屈み、スケッチブックの上に鉛筆を滑らせる青年の姿を、じっと見つめていた。

何、描いてるのかな。

気になって、顔を上げる。おそらく青年が見ているであろう場所と同じ場所を見遣れば、そこには、

「……あ」

さっきの、コスモスだ。
どうやら。

美言の見たところによれば、今、この青年がスケッチブックに描き収めているのは、たった一本でのびのびと太陽に向かって背を伸ばしている、あの、紅色のコスモスのようであった。

紅色の、コスモス。紅い、秋桜。

ああ、なるほど。

「愛情、ってね、言うの」

歌うように微笑んで、美言は箒を地面へと置くと、

え、何が？ って？

何が愛情かって、そんなこと、問われてもいないけれど。

それは勿論、何が愛情かって言うと、

「花言葉、ね？ 紅いコスモスの花言葉は、愛情、とか、調和、とか」

ねえ、もしかして、

「君も、お花が好き？」

だってそうじゃないと、スケッチなんて、しないでしょ？
で
もし、本当にそうだとすれば、

……美言は、嬉しいんだけどなあ。

だって、自然を愛する人には、悪い人はいないもんね？ などと。勝手な思い込みだとはわかってはいても、どこか自分の中では確信を持てる考えを心の中で呟いて、美言は胸の前で手を組み、思わずほつと息を吐いていた。

それから、暫く。

穏やかに、滑らかに、さらりさらさらと、青年の鉛筆が花の輪郭を写し取る音だけが響き渡る。

美言が瞬きをする。いつの間にかその意識が、青年のスケッチブックの中へと惹き込まれて行く。

縁の黒ずんだ、スケッチブック。どれほど使いこまれているのか、ということが、一見しただけでわかってしまう。

その新しいページに、あつという間に、コスモスの形が出来上がる。まだ色は着けられていなかったが、本当に、

「……綺麗」

淡い感動を滲ませた声音が、美言の口から零れ落ちた。

青年は鉛筆を左手に持ちかえると、スケッチブックを指先でひらりと捲った。

この森の、ありとあらゆるものが、その姿を描き残されていた。秋の花に、キノコに、蝶々に。舞い落ちる、木の葉に。

それから、それから……。

美言の大好きな、ありとあらゆるもの。

「すっごいね」

どうしてか、嬉しくなってしまう。

この森は、美言の大好きな場所。その場所を、こんなにも美しく描いてくれる人が、
いるだなんて。

そこに封じ込められた世界に是非とも触れてみたいと、素直にそう思う。そこはきつと、間違い無く。美言のよく知る、或いは、それ以上に美しいこの森が、広がっているに違い無い。まるで、御伽噺の世界。

美言は青年の横顔に、ふ、と視線を巡らせる。

黒い瞳に黒髪、襟のついたシャツの良く似合った青年。妙に大人びた雰囲気、沈黙がしつくりと嵌り込むような、感じの。

その少し不機嫌そうな顔が、美言の望みなど知らずに、ぱたむ、とスケッチブックを閉ざした。

「あ」

まるで、読んでいた絵本を途中で取り上げられたかのような気分、美言が抗議の声をあげかけた、その時。

何の前触れも無く、青年がすつくと立ち上がる。

「あ、ねえ、ちよつとっ」

慌てて美言も彼に続くが、しかし、青年は美言の方を、ちらりとも振り返ろうとしなかった。

ただ、畳んだスケッチブックをしっかりと片手に抱え、美言が帰ろうとしていたのとは逆の方向に、足を進めて行く。

最初は小走りで行って行った美言ではあったが、

「ねえ、君、お名前、何て言うの……？」

問うて、答えてもらえなかったところで、流石に傍に足を止めていた。

美言は、規則正しい間合いで遠ざかって行く青年の背を見つめながら、立ち上がり際、慌てて拾い上げていた筈の柄を両手で握り締めて呟く。

「何なの、あのヒト……」

美言もしかして、もう嫌われちゃったのかなあ……。

コスモスの花が、静かに風に揺られていた。

第2章 - A

あーあ、今日もダメだったつ。

太陽が、そろそろ地上に向かって、降り始める頃。

美言ったら本当ダメだなあ……。

月代の街中には、頬を膨らませたまま俯き、石畳を蹴飛ばしながら、街の高台へと歩みを進める、美言の姿があった。その手には、美言が庭の花畑から摘んで来たばかりの秋の花が、新聞紙に包まれて持たれていた。

石造りの建物が目立つ、歴史的風合いの強い月代の街は、今日も地元特有の穏やかな活気に満ち溢れていた。

花を飾った洋風屋台から、或いは、愛らしく飾られた小さな店の玄関から、

よお、美言ちゃん！ 今日先生と喧嘩でもしたのかい？

美言ちゃんつ、今日は機嫌が悪いみたいだね？ どうだい？ うちのケーキでも食べて行かないかい？

相変わらず陽気に話しかけてくる街の人達へと、それでも挨拶と笑顔とは忘れなかった美言ではあったが、

……中々、上手くいかないよね。

笑って街の人達に応えている間にも、今日の出来事を 否、ここ最近の出来事を、忘れることができずにいた。

歩みを進めれば進めるほど、坂が急になればなるほど、浮かない気持ちには強くなる。

美言は、胸元で花を抱きしめる力を、少しだけ強くする。甘い香りが、ほんのりと流れて行った。

どうにも、魔法が上手くならない。

最近はずっと、そればかりを感じていた。今日も今日で、先日からずっとやっているのと同じく、折れた木の枝を繋げる練習に励んでいたのだが、やはり、初めて練習を始めた日と変わらず、目標をや

り遂げることは叶わなかった。

比較的美言が得意としている空を飛ぶことでさえ、最近は成長に伸び悩みを覚えているのだ。どんなに高く、速くと望んでも、筈は、今まで以上の動きを見せてくれはしなかった。

勉強は、それなりにしてるはずんだけどなあ。

魔法の基礎については、きちんと机に向かって連日勉強している。それなのに、確かに魔法は、知識だけではどうにもならないとわかってはいても、

……美言、やっぱり才能無いのかなあ……。それとも、頑張りが今一つ足りないとか？

単に不調な時期なのか。それとも、美言にこれ以上の才能が無いということなのか。

確かに、ルーカスは連日、そういう時期もありますよ……と言つて、美言のことを元氣付けてくれようとするのだが。

「どうなんだろ……」

ふう……と大きく溜息を吐くと、花を手にしたまま背中を手を組み、足下に落ちていた石ころをからりと蹴飛ばした。

坂は、高見に向かって、その角度を急にしてく。道は街の中心部から外れ、元々それなりにまばらであつた人通りが、いよいよ本当にまばらになってくる。

あーあ……でも、元氣出さなきゃなあ。

落ち込んでても始まらないもんねっ、と、今日はもう何度も言い聞かせている言葉を、もう一度自分の心に言い聞かせると、美言は鬱積を振り払うかのようにして、先ほど蹴飛ばされてここまで飛ばされてきていた石ころを、もう一度おもいきり蹴飛ばした。

そうして、顔を上げる。

「……あ」

そこで、声が洩れた。

坂の上には、一人の青年が立っていた。美言には、その青年に見えるがある。

「こん、にちは。……久しぶり、だよな？」

あの時の人だ。

ぎこちなく頭を下げた後、そろりそろりと、青年へと視線を向ける。

青年の手に抱えられているのは、スケッチブックと、筆入れと。

相変わらず、固い表情の青年は、

「……やあ」

短く呟くのみであった。

「あ、あのね？　もしかして石、当たっちゃった？」

だから君、機嫌が悪いの？

続けて、慌てた美言へと、

「別に」

視線を逸らして答えると、青年は美言に向かって歩を進めて来た。

あ、もしかして、

……少しは、仲良くしてくれる気になったのかな？

たった一度、森で会ったことがあるだけのあの青年。

でもね、美言は、君とちょっと、仲良くしてみたいなあって、や

っぱりそう思うんだけど、どうなんだろう？

「ね、やっぱり君、この街に住んでたんだね？」

積極的に応えてほしくて、問いを重ねる。

その時、ふと、自分がまだ、彼に対して名乗っていないのだということを思い出した。

あつ、そうだった、

「あのねっ。みこ、」

とは、美言、って言うの。

早速自己紹介をしようと、笑顔を浮かべた頃には、しかし青年は、美言の横を通り過ぎている。

美言が、慌てて振り返る。

「ねえ、ちょっとっ！」

「何か用事でも？」

「別に用事なんて無いけどっ！ また会えたんだもん、ね、お名前くらい教えてくれたって……、」

「はいはい、また今度」

数歩だけ追いかけた美言ではあったが、今回も軽くあしらわれ、その場に立ち止まってしまふ。

ぷう、と頬を膨らませ、

……何、あのヒト。

「ケチっ！」

思わず素直な心が口をついて出てきたが、それでも青年は振り返る気配を見せてくれなかった。

その後ろ姿は、坂の下へと溶けて行く。坂の下に広がる、古びた色合いの月代の街へと。

もうつ。

美言は溜息を吐いて、坂の下り方面を向いたままで、視線を上げた。

月代の街が、そうして、その下の街が、都会が、海が、一望できる場所。月代の街の中でも、最も高い場所。

月代は、高台に造られた街であった。時代も遡り、明治、と呼ばれた頃に、外国人のための街として開発されたこの場所に住んでいた異人達は、遠い昔、或いはこの高見の光景に、優越感を感じていたのかも知れない。

遠い都会の向こう側で、海がきらら、輝きを散らせている。

青い風を受け、美言が瞳を細めた。

美言の大好きな月代の光景が、ここにも、一つ。

「……ま、いつか」

そんな世界に包まれて、すっかり機嫌を落ち着けた美言は、胸元で花を抱えなおすと、踵を返して坂を上り始めた。

坂の上から、時を告げる、教会の鐘楼の鐘の音が響き渡った。

第2章 - B

月代の一番の高台には、埃っぽいような木の香りが一昔前を思わせる、少し大きめの教会が建てられていた。

古びているため、がたつきの酷い扉を力任せに押し開けて、美言はその中へと入って行く。扉を閉めるとすぐに、慣れた足取りで、今日も人の気配の薄い教会の廊下をばたばたと駆けて行った。

それから、暫く。

「もしかして美言ちゃんあやみは、彩海に、お会いになったのですか？」

教会の客間で、ケーキをつつきながら小さな来客者に向かって微笑んだのは、白髪がよく似合うスータン姿の男性。この教会の主任司祭ではあれど、カトリック教会の聖職位階では司教の位置にいる男性であつた。

司教は、誰もいない聖堂で、何気無いことに思考を廻らせていたところ美言から声を掛けられ、受取った花束を祭壇の前に飾った後、こうして客間に場所を移し、洋菓子と紅茶とを共に、美言を相手に話しに花を咲かせていたのだが、

意外でしたね。

ふとした切欠から、話は意外な方向に進み始めていた。いつもであれば、美言が司教の元へと遊びに来れば、二人の間で話題となるのは、二人の共通の知り合いであるルーカスのことばかりなのだ。

しかし、今日はどうかやら、そうもならなさそうであつた。

「……へ？」

アヤミって、誰？

美言は、司教の口から出た聞き慣れない名前に、そう言いかけたところで、ふと気がつく。

ああ、だって今は、美言達、

「アヤミって……もしかして、今美言が話してたあの男の子のコト？ 無愛想で、スケッチブックを持ってるーって」

あの人の、話をしているんだもんね？

だったら他の人の名前が出てくるはずないじゃない、と、美言は自分で自分の問いに答えを出す、

「司教様、あの人……じゃない、アヤミ君のこと、知ってるの？」

ケーキを一口、紅茶を一口する。

「知ってるも何も……ですね、彩海には、今この教会の一室を貸しておりますね」

「……へ？ この教会の？」

どうして急にそういう話になってるわけ？

話の急な展開についていけない美言が、小さく眉を潜める。

司教は一息を置いてから、

「どこから話せばいいものでしょうかね」

「どこから、って、そんなに話が長くなりそうなの？」

「まあ、美言ちゃんの質問に答えるために、彩海について、順を追って話させていただく……ということ、宜しかったですか？」

「うん。じゃあ、お話聞かせて、ね？」

美言の笑顔を受けて、司教が一つ、紅茶を口にする。

かたんつ、と陶器のぶつかる音が響き渡る。ソーサの上にカップを置いた司教が、ゆっくりと口を開いた。

それから。

司教から美言に話されたことは、次のようなことであつた。

彩海は、司教の兄の孫であり、二人の間には血縁があること。

彩海は東京の美術大学に通っている大学生で、今は夏休みも終わったが、様々な理由から、この月代に 司教、つまりは大叔父の所に来ているのだということ。

美術大学に通っているだけあつて、彩海は絵を描くことが好きであるということ。とりわけ、様々な所の美しい風景を、ゆっくり描写することが一番好きであるらしい、ということ。

そうして。

「……え……？」

「急なことでしたからね。彼はもう大学生です。一人で暮らすこともできて当然な年齢ではありますけど……。色々都合があつて、私のところに話がまわってきたんです。彩海も田舎の方で絵を描きたいと言いますし、東京からここまでですと、そんなに馬鹿みたいに遠くはありませんからね」

「ちよつと待つて……。それじゃあ彩海君のお母さんって、」

「容態の急変なんて、あり得ないと信じてはいますけれどもね。もしも、のことがあれば、或いは……という話は、あることには、あるんですよ」

「お父さんは？」

「彩海が高校生の時に、亡くなつてしまわれましてね」

「じゃあ、」

”もしも”のことがあれば。彩海君には、お父さんもお母さんも、いなくなつちやうつてこと？

付け加えて頷かれ、美言はかすかに頭を俯けた。

今、彩海の母親は、東京の病院に入院しているのだという。

司教曰く、それが、彩海がこの月代にやって来ている理由の、一番大きな部分を占めるものであった。

「傍にいて、あげなくていいの？」

「彩海が、お母さんの傍に、ですか？」

「うん……」

だつて、こういう時こそ、傍にいたくちやあ、駄目なんじゃないの？

問うてきた美言へと、

「彩海は、信じているんですよ。お母さんに、もしものことなど起こりはしない、とね。むしろ、彼女が頑張っている間、自分も頑張ろうつて、そう決めたようですよ」

「自分も頑張るって？」

「夢を叶えるために、ですよ。彩海はどうやら、今度のコンクールに、作品を出すつもりだそうです。ですから、その作品を描くため

にも、月代に来ているんですよ。絵の題材が、中々見つからないよ
うで、ずっと悩んでいたようです」

「コンクールに、作品を？」

「あの子は、絵描きになりたいそうでした。彼の父親と同じ、絵
描きになりたいそうです。それで、今度のコンクールは大きなコン
クールらしくて、全力で取り組んでみようと思っているみたいです
今時珍しいでしょう？ そんな現実的じゃあない夢、って、お
思いになるかも知れませんが、」

「そんなことないよ。すつごく、素敵な目標だと思うよ？」

彩海君のお父さんは、きつと立派な人なんだね、と、司教の意見
を即否定すると、

「素敵だね、そういうの。美言は、良いと思うな」

言葉は、心の奥底から溢れ出たものであった。

「夢に向かつて、頑張るって良いよね。アヤミ君は、とっても偉
いと思うな。……美言もやっぱり、頑張らなくちゃ だって。」

あのね、司教様。最近美言も、上手く魔法が使えないんだけど……、

「

と、唐突に。

司教が、まるで美言の話を遮るかのようにして、自分の口元に人
差し指を当てた。

不思議そうな表情で美言が黙った頃に、後ろを振り返る。

そこには、

「大叔父」

開かれた客間の戸の横に寄りかかる、スケッチブックを手にした
あの青年の 彩海の姿があった。

司教は、ふ、と微笑むと、

「どうしたんです？ 彩海、確か先ほど出かけられたはずじゃあ……

……、」

「忘れ物があって、取りに戻ってた。ついでに、帰りに買ってくる
物でも無いかどうか、聞きに来ただけ……、」

ちらり、と美言へと、彩海から視線が投げかけられた。

美言は一瞬、ぴくり、と身を竦めると、

「こん、にちは」

控えめに、先ほどと同じ挨拶を投げかけた。

……どつから、話聞かれちゃったんだろ。

まずかったかなあ、と、素直にそう思う。多分、普通の人が魔法などという言葉を聞いたところで、その真意を知ることなどできない。おそらく、奇術やマジックと勘違いするに違い無いのだ。ということとは、十分わかつてはいたものの。

しかし、彩海が特にとりわけて驚いた反応を返して来ないところを見ると、やはりそのような心配は必要無いものであったらしい。

そもそも彩海君が、本物の魔法使の存在なんて知ってるわけ、ないよね？

まっ、いつかつ、と、美言はすぐに、考えを切り替える。

美言はソファからすつくと立ち上がると、やあら、彩海の方へと歩み寄った。

今度こそ、仲良くしてもらおうと。

今がチャンスつ、と言わんばかりに、美言は、戸の横に寄りかかったままの彩海の前で立ち止まり、彼を真っ直ぐに見上げると、

「宜しくね」

「……は？」

そんな美言の行動に、思わず彩海は、間の抜けた声をあげていた。よくもまあ、この子も飽きずに、僕に構いたがつてくる。面倒な人付き合いは、するつもりが、無いんだけど……僕は。

「宜しくなんて、何で急に、」

「美言はね、美言、って言うの。あのね、美言、君の話、司教様から聞いてちゃったんだけど、君は確か……、」

「彩海」

答えた瞬間、はっと口を噤んでしまう。

僕は今、何て言った？

彩海、などと。彼女の自己紹介に釣られて、今自分は、下の名前を名乗りはしなかったか。こんなほとんど初対面の、女の子に向けて。

何やってるんだ、僕は。

自分自身に、深く呆れ返ってしまう。

「あ、よかったつ。やっぱりそうだったよね！ 宜しくね、彩海君」
その上少女は、まるでこれから自分と付き合いを続けていききたそうにして、満面の笑みをこちらへと向けてくるのだ。

わけ、わかんないな。

名乗って早々、随分と馴れ馴れしいヤツだとも思う。ただ、不思議と、面白いほどに、その笑顔を見ていると、悪い気が湧いて来なかった。

ふと視線を落とせば、少女からは右手が差し出されていた。

少年も、やれやれ……と言わんばかりにして手を伸ばす。

「宜しくねっ」

「あー……、はいはい」

曖昧な返事で頷きながら、困ったような視線を司教へと泳がせた。司教は、微笑を浮かべると、

「良かったじゃあないですか、彩海。美言ちゃんは、本当に良い子なんですよ？ 月代に良いお友達ができて、本当に、良かったですね」

「別に良くなんか……、」

僕は、人付き合いは、狭く深くが、主義なんですケド。

「あのねっ」

ようやく打ち解けることのできた嬉しさのあまり、司教と彩海との会話を遮って、美言がぴょこん、と飛び上がる。

「君、絵を描きたいんだって？」

「だったらどうし、」

「そんな冷たいこと言わないで！ あのね、仲良くなれた記念！」

美言は、彩海の手を握る力を強めると、

「彩海君に、すごい場所、教えてあげる！」

そのまま、彩海を引っ張り、司教への挨拶もそこそこに客間を飛び出して行った。

その場に取り残された司教が、少し嬉しそうな苦笑で、二人を見送った。

美言の残していったティーカップから、紅茶の香りが、甘く、広がる。

「……やれ、若いってことは……」

少しばかり、羨ましいかもしれませんね。

第2章・C

駆けて、駆けて、海の見える坂道を駆けて下り、人の賑わう街の中心を、よ、美言ちゃん、デートかいっ？ などという揶揄の声も気にせず、駆け抜けて。

ちよつと、どこまで行くつもりなんだ？

彩海からそう問いかけられても、美言は事実をはぐらかして答えるばかりであった。

どこつて、いいからついて来て！ 彩海君に、見せたい場所があるの！

はしゃぐ美言に引つ張られながらも、彩海の視線は、殆ど常に街の景色にあった。

高台から見える都会の景色。青い海。水平線とぶつかる空。古びた街並み。ひび割れた石畳。美言に微笑みかける街の人々。道脇の花壇に咲く花々、緑、秋の色。人通りの減った小道で寝そべる猫。

月代には、都会には無い景色が沢山あった。まるで、

……まるでそこは、御伽の国でした、だ。

無機質な灰色のビルとビルとの間にある小道を抜けたその先に、不思議な世界が広がっていたかのような印象さえ受けてしまう。

彩海の普段住む東京とは、全く違った感覚を香らせる街。尤も、東京にも、美しい場所などいくつも存在しているのだが。

でも。

「ねえ、綺麗、でしょっ？ 月代は」

「……まあね」

流石に少し歩む速度を落として問ってくる美言に、彩海は素っ気無い言葉で心の内を明かした。

境界線が、これほどにまで美しいとは。街と、自然との境界線が、こんなにも自然に存在しているとは。東京では、中々味わえない感覚であった。

この柵の向うが緑の咲く公園で、その手前はビルの高い人の世界などという明確な区切りは、ここには存在していなかった。ただ、街と自然とが、溶け合うかのように共存しているのみで。

鳥達の鳴き声が、賑わいを増す。落ち葉がからからと、道に乾いた絨毯を敷き始めている。

彩海は気がつけば、美言に連れられるがままに、街外れのあの森へとやって来ていた。

「美言はね、月代にもう五年も住んでるの。でも、全然飽きないんだもん」

月代は、美言の大好きな街。確かに、都会の文明からは、置いていかれているような場所だけど、

「ホンモノが、たーつくさん、あるんだよ？」

都会には無い純粹なものが、ここには沢山ある。人のために造られた自然ではなく、自然が自由に造り出した自然がここには沢山ある。

……ねえ、

「彩海君は、月代に来てから、何を描くか、決まったの？」
「別に」

決まっていれば、こんなことしてないしね。

心の中で付け加えた瞬間、美言に取られている方の手とは逆の手に、スケッチブックと筆入れとの感触が思い出された。

もし題材が決まっていれば、今頃自分が抱えているのは、キャンバス立てにキャンバスに、油彩のセットが一式だ。それから、小さなテーブルと、椅子と。

……ある意味、スランプなのかもね。

美言には気付かれないように、溜息を吐いた。決して月代の光景が気に入らないわけではない。むしろ、東京で絵画の題材を探していた時よりも、ずっと良いものがここには揃っている。美言の言う通り、月代にある自然は本物だとさえ思う。どうせ描くなら、本物がいい。だが、それでも、

今一、って、いうのかな。

ピンとくるものが、中々見つからない。ゆえに彩海は、日々月代の街を様々に歩いては、目に留まったものをスケッチして歩いているのだが。

「自然が、好きなんだよね？ 風景画が、描きたいんでしょ？」

「大叔父もお喋りだな……」

「だって、司教様と美言はオトモダチだもん」

紅いコスモスが、道端で、二人を迎えるかのように揺れている。木々の緑の間から、太陽の光が淡く差し込んでくる。

そこで彩海が、ふ、と気がついた。

……ここ、って。

ああ、そうか、

「……それよりね、だったら美言、凄い場所を教えてあげる」

自分がこの前、来た場所だ。それも、数日前に、この少女と始めて出会った、あの場所だ。

美言は彩海の手を取ったまま、まるで我が物顔で、その道を歩き続ける。

小さな手が、少しばかり冷えた空気の中で、ほんのりと暖かく感じられた。

相変わらず時代錯誤なワンピースの不思議とよく似合った、表情豊かな明るい少女。どうしてか、こうしてよく話してみれば、今までのように突き放す気も起きてこなかった。

二人はそのまま、二言、三言をぼつり、ぼつりと交わしながら、森の奥へと入り込んで行く。

そうして。

「ほらっ！」

唐突に、視界が、開けた。

思った瞬間、光のきらめきを背景にして、美言は彩海から手を離し、両手を広げて満面の笑みを浮かべて見せた。

花の香りが、鮮やかになる。

彩海が、吸い込まれるかのように、その明るみに引き込まれてゆく。

「すごい……」

一面の、コスモス。木々の壁に護られた、広い、広いコスモスの海。

緑の細い葉が敷き詰ったその上に、浜辺の砂の数を思わせるほどの花が、太陽に向かって背を伸ばしている。

美言は、折れてしまっていた紅いコスモスを一輪摘むと、指先でその花をくるりくるくる遊ばせながら、

「ね？ 彩海君がもし花とか、そういうの好きなんだったら、きっとここも気にいってくれるんじゃないかなって、そう思ってた。……あ

あのね、この場所、美言がこの前偶々見つけた場所なの。ね？」

内緒にしてよ？ まだ誰にも、教えてないんだから。

悪戯っぽく付け加えて、美言は彩海の横に並んだ。

その横顔を、見上げる。世界を見詰める真剣な眼差しが、酷く印象的であった。

彩海はスケッチブックを胸の前に抱えると、神妙な面持ちで、ぼつり、と呟いた。

「……これなら、」

いけるかも知れない。

今まで、どんなに素晴らしい景色を見ても、全力でその風景を絵に収めようとは、どうしても思えなかったのだ。軽いスランプだったのだとも思う。ただ、一方で、今まで見てきた景色から、訴えを感じてこられなかったことも、事実であった。コンクールの題材とするからには、強い訴えを感じることできる景色を、描きたかったのだ。

彩海の尊敬する、絵描きであった、父親の口癖であった。よい絵には、よい題材が必要なのだ。そうして、よい題材とは、自分に対して”訴え”を遣してくる題材なのだ、と。目に見えないその”訴え”を描き込むことができなければ、誰も決してよい絵描きには

なれないのだ。絵とは、ただ平面の世界に、絵具を乗せればできるものではないのだから。

絵描きは、疲れる仕事だよ。よく見て、聴いて、嗅いで、感じて、味わって 体をフルに使って、初めてようやく、キャンバスに向かうことが、できるんだよ。彩海、もしお前が父さんと同じ道を歩みたいのなら、よく、覚えておきなさい。

父さん、母さん。

「描けるかも、知れないな」

ようやく、見つかったのかも知れない。

お喋りな花々が、随分と楽しそうに、笑い合っているような気がした。生きている世界がある、と、そう思えた。

この、景色なら。

或いは本気で、絵の題材に、することができるとも知れない。

第3章 - A

空は、高くなる。風は、冷たさを帯びる。

木々も乾いた葉を落とし、その葉が街の賑わいに、彩りを加えるような、この季節。この書斎の花瓶に美言によって飾られる花が秋めいてきてからも、久しく時が経つ。

冬も、もうすぐそこなのかも知れませんか。

棚の上に飾られた花瓶の中で、秋の花が、揺れていた。その中で、一際鮮やかな、紅い、コスモス。この前、美言がどこから持ってきたらしい、この家の庭にあるコスモスとは少し、形も香りも違う印象の花。

調和に、それから、愛情、
でしたっけね。紅いコスモスの、
花言葉は。

そのようなことを考えながら、時の流れは早いものです、と、ふとそんなことを思う。もうあれから数十年、もう美言と出会ってからは五年……と、今までの時を、ルーカスがしみじみと思い返していた、その時であった。

リン……と甲高い音をたてて、扉に取り付けられているベルが、
来客を告げた。

自分の書斎で、膝の上に本を広げ、いつもの安楽椅子からのんびりと窓の外を見遣っていたルーカスが、静かに体を起こす。

来客者は、当然のことながら、美言であった。

美言は、花瓶の花がまだ枯れていないことを確かめてから、ルーカスの傍へとぱたぱた駆け寄ってきた。それから、数分。ねえ、今日は美言、デザートにプリンアイスでも作ってみようと思うの！

などと、他愛の無い話を続けるうちに、

「美言はね、先生のことが、だいすきっ」

美言の口から、いつもの台詞が出されたのは、あまりにも当たり前すぎる、いつもと同じ話の流れであった。

言って美言は、いつもと同じように椅子の後ろから、背伸びしてルーカスに抱き付き、その存在の大きさに、安堵したように息を吐いた。

美言の瞳が、そのぬくもりに自然と細まっていった。

いつもの、光景。

美言が、想いを告げる。ルーカスが、無言のままでそれに応える。ルーカスは、胸の前で絡む美言の手に、自分の手をそつと重ねて微笑んだ。

美言。

「甘い香りが、します」
けれど。

どうしてか、ふと、その指先が、暫く前よりもすらりと線を伸ばしているような気がして、ならなかった。

「そう、かなあ？」

いつもと同じ。そのはずなのに、いつもと違う　そんな気がして、ならなかった。

振り返れば、満面の笑みを浮かべた美言と、視線がぶつかり合う。
「ええ。……花の、香りでしょうかね」

今日は少し、おかしいかも知れませんが、私も。

その笑顔に、不意に、こんなことを訊ねたくなってしまう。
ねえ、美言。

変なことを、訊いてしまってもいいのであれば。……あなたはいつの間に、またそんなに大人びてしまったのですか？

問いかけても、きっと誰も正しくは答えてくれないであろう。毎日美言に会っているルーカスでさえ、このようなことには、ふとした瞬間にしか気付くことができないのだから。

一六歳。オトシゴロ、の、美言。ふと気がつけば、彼女は、信じられないほどの速さで、子供から大人へと姿を、そうして、心をも変えてゆく。少しでも目を離してしまえば、

見失って、しまいそうですね。

美言が、美言ではなくなつてゆく。しかし紛れも無く、美言は永遠に、美言のままなのだ。

「……コスモスの、香りかなあ？」

「コスモス？ また、コスモスですか？」

持ち上げたスカートに鼻先を当てて、香りを確かめた美言がうーん、と呟く。

その仕草が、先ほどまでの美言から受けた印象からはかけ離れ、妙に子供染みて感じられてしまう。

「そつ、コスモス、だよ」

「庭のコスモスのお手入れでもしてきたんですか？」

美言はどうやら、本当に、コスモスがお好きなようですね。

「うつん、違うの」

そんな彼女の姿に、知らず、緩く息を吐いていた自分。

そうして、気がつく。

……私、今、

安心、していたんですか？

「森にね、行つて来たの」

「おや、そうだったんですか？ てつきり私は、夕食の買出しにでも出かけていらつしやるとばかり……」

表面上では平穩を装うルーカスの内心が、めまぐるしく、混乱してゆく。

大人になつてゆく美言。それでも、その端々に覗く、子供特有のあの無邪気さ。それを見て、安心していた自分。

美言は、美言のままです？ でも、……美言は、美言のままでは、なくて？

そのうち、ふと考え着いた。

「コスモス畑が、すつごく、綺麗なんだよ」

「へえ……それはそれは」

背伸びしていた美言の足が、床にしっかりとついた。美言の暖かさが、ルーカスからふ、と、離れて行く。

何気無い一瞬の出来事に、ルーカスの懸念が強くなる。

……懸念？

よく考えてみれば、そんなことは、当たり前のことであるはずで
すのに？

「そういえば美言、最近外に出かける回数が増えていますものね。
私はてつきり、美言に新しいお友達ができたのだばかり思ってい
たのですけれど……もしかして、そのコスモスを見に出かけていら
っしゃるのですか？」

いつか彼女は、自分から、離れて行ってしまうのかも知れない。
否、考えたことも無かったが、それが当たり前のことなのかも知れ
ない。　　いいや、きつとそうに、違い無い。

美言は、ルーカスのものではない。そうして美言が、いつまでも
ルーカスの傍にすることを望んでいるとは限らない。

人の望みは、移ろいやすいもの。美言の自分へと対する愛情を疑
うわけではないが、彼女にも、自分より大切な存在ができてしまう
時が、そのうち来るかも知れない。その上子供は、いつか親の元を
離れて行つて然るべきものなのだ。

「うーん……だって、」

珍しく美言は口籠ると、さり気なく、を装つて、ルーカスから視
線を逸らした。

何て言えば、いいのかな。

ルーカスの問いを受けて、美言は背中中で手を組みなおす。

何と無く、ルーカスの視線が少しだけ心に痛かった。

答え？

そんなの簡単じゃない……先生の言葉に、うん、そーだよって、
いつものように頷けばいいだけ、……だけ？

本当に、それだけなの？

美言、それじゃあ、先生にウソ吐いてることにならない？　　な
るはずないよ、ね。だけど、……どうしてだろ、

あ、そっか、

「本当に、綺麗な場所なんだもん。一面に、コスモスの花が咲いてるんだよ。ピンクに赤に紫に白に……でね、」

彩海君も、あそこに、いるから。
たった一言、それを付け加えて。彩海君ってこんな人なんだよーって、いつものように、教えてあげればいいだけ、なんだよね。
なのに。

だけど、

「秋が来たなあ、って、そういう感じ、するでしょ？ 一面のコスモスは、ほんとうに綺麗なんだもん」
しかし。

美言の口から、彩海の話が出てくることはなかった。

「コスモスはね、秋桜、って言われるくらいだし」

一言付け加えて、美言はもう一度、背中で手を組み替えた。

その、珍しく歯切れの悪い口調に、ルーカスがきよとり、と眼鏡を押し上げた。

「そう、ですか」

「うんっ。ほんとうに綺麗な場所なんだ……」

てへへっ、と笑った美言が、そのまま沈黙してしまう。

言葉の無い時間を、しばし、窓から流れ来る風がふわりと埋め過ぎ。

やがて。

「……あ、そうだ、美言晩御飯の買出ししてくるねっ。今日の晩御飯の当番は、美言だったもんねっ！」

美言は唐突に踵を返すと、ぱたぱたと駆け出して、書斎を後にしてしまう。

開かれ、すぐさま閉じられた扉のベルは、リン……と余韻を残して、ルーカスの耳に響きを届けていた。

一瞬にして、部屋がしん、と静まり返る。

ベルの音すらも、消え去った頃。

「美言」

ルーカスが、椅子へと深くかけなおす。

安楽椅子をゆらり、ゆらりと軋ませて、細く、長く息を吐いた。そう、思っていた。絶対、いつものように、腕を捕まれせがまれて、ねえ、一緒に行こうよ！ と、お願いされるものだとばかり思っていた。

先生、一緒に行こうよ！ ね、美言、先生と一緒にいきたいの。

大好きな人を、大好きな場所に連れて行きたいの！

ねえ。

或いは。

先ほど自分は、そう言って美言が笑いかけてきてくれることを、期待していたというのだろうか。

……そんなこと、ありませんよね。

ルーカスは視線を、本へと戻す。しかしなぜか、ルーカスにとって文字は全く意味を成して見えてこなかった。

それでも、無理やり本へと意識を集中させる 徐々に変化してきている何かに、美言の姿に、気付きたくないと言わんばかりにして。

第3章 - B

いつの間にか、それが当たり前になっていた。

美言は魔法の練習と勉強とを終わらせ、昼食を食べ終わると、ほとんどいつも、森を抜け、コスモス畑へと足を急がせる。

そこには、必ず、あの人がいるのだから。

キャンバス立てを構えて、椅子に腰掛け、絵を描く彩海の姿。今日も、

「……ねえ、それが終わったら、一休みしようね。美言、今日はクッキー焼いてきたの。一緒に、食べよ？」

美言が何度話しかけても、彩海は中々応えてくれなかったが、美言にとっては、それで十分であった。

真剣な、眼差しが好き。それに、踏み込んだりあいけないような彼の世界にいても、追い出されないことが、少し、嬉しくて。

ねえ、君って、やっぱりちょっと、不思議な人だね？……別に美言、ここに来て、何してるってわけじゃないけど、彩海君と一緒にいられると、少し、楽しくて。

最初は線の集まりばかりが目立っていたキャンバスの上には、今や、このコスモス畑を取り囲む、木々の姿が描き込まれている。緑に、そろそろ赤や黄色の目立ち始めたこの森の色を、

彩海君は、こういう風に描いていくつもり、なのかな。

どうやら彩海は、この場所を絵の題材として決めたようであった。少しでも彼の力になればいいことを、美言は妙に誇らしく感じてしまう。

そうして、今。

一休みしよ……、と、椅子から立ち上がった彩海と、その後ろで彼を見ていた美言とは、クッキーを囲んで、他愛の無い話に花を咲かせていた。

「ねえ、美味しい？」

「まあね。不味くは、ないかな」

「その言い方、カタイね。素直に美味しいって言うてくれれば良いのに」

言葉とは裏腹に、彩海の手は、何度もクッキーへと伸びている。

美言は顎の下で手を組むと、

「でも良かった、彩海君が、甘い物好きで」

ちよつと、意外だったけど。

それにしても、少しでも喜んでもらえたのであれば、

本望、ってヤツ、かなつ。

「ねえ、もし少しでも気にいってくれたんだつたら、今度美言の家に、ご飯食べに来ない？ 美言が、お料理するからっ」

「……考えとく」

「じゃあ、是非来てよ！ 先生のコトも、紹介したいしねっ」

「先生？」

そういえば、美言はいつもことある毎に、先生、先生と口にして
いるが、

「誰？」

彩海はその先生、とやらを、まだ知らないのだ。

珍しく、彩海の方から問いかけられ、美言はあつ、と思いついた
かのように瞬きを一つ、二つ。それから、口元に笑みを浮かべると、
「美言の、お父さんみたいなヒト、だよ。美言はね、先生と一緒に
暮らしてるの」

「……お父さんみたいなの？」

「そつ。美言をね、死んじやったパパとママの代わりに、ずーっと
大切にしてくれてるの」

というと、美言の両親は、

もう、この世にはいないってこと、か？

「悪かった」

何と無しに、謝罪の言葉が口を突いて出た。偶然の話の流れであ
ったとは雖も、美言に、辛いであろうことを思い出させてしまった

のだから。

美言はその言葉を受け、びっくり、と慌てて両手を横に振ると、
「いやっ、別にっ。気にしないでっ！ 美言は別に、そーいうコト
気にしないもんっ」

でも、彩海君は、やっぱり優しいんだね？

言葉の後半は飲み込んで、美言がくすり、と忍び笑いを洩らす。

「何」

「うっん、何でもないっ」

相変わらず無愛想だけど、でも、悪い気は、しないもんっ。

さり気無く、少しだけ彩海との距離を詰めると、美言はクツキ
を口にした。

「そんなことよりもさ」

話題転換。このままだと、何となく、話が続かなくなってしまっ
ような気がしたから。

「彩海君は、本当に絵が上手なんだね？ 美言はね、彩海君が色を
着けるの、楽しみに待ってるんだっ」

そこに立てられているキャンバスを見遣ってから、彩海へと視線
を戻す。

彩海は、クツキを飲み込んでから、

「だと、良いけどね。でも、僕より才能のある人なんて、沢山いる
よ。僕が特別、上手いわけじゃあない」

そりゃあ、その辺の人よりは、上手い自信がありますケドね。

何せ自分は、絵を専門的に勉強しているのだ。確かに、何もノウ
ハウを知らない人よりは、上手く描く自信くらいはある。

ただし、その程度だ。

苦笑すると、

「でも、彩海君は、絵描きさんになりたいんでしょ？」

「そんな夢なんて、って、いつも言われてる。美大なんて通ったっ
て、どうにもならないとも散々言われたからね。…… 都会は、現実
は、君が思っている以上にシビアなんだよ」

美言の問いに、自分に対しても厳しい答えを返した。

「うーん……、でも、」

夢があるって、ステキなコトじゃない？

「それに、僕が月代に来てること、親戚の連中はあんまり好く思っていないからね。まあ、大した付き合いも無い連中の言うコトなんて、どうでもいいけどさ」

こんな時に、何考えてるの！

言われたことが、無いわけではない。母親の入院原因は、”もしも”の可能性を孕むものなのだから。

しかし、

「でも、約束したからね」

母親と、そう、約束したのだ。

彩海は、彩海の夢を追いなさい。私も頑張るから、あなたも、頑張ってください。

母親が倒れたのは、彩海がそろそろ、コンクールの準備を始めようと考えていた、丁度その時のことであった。

大学で、母親が倒れたとの連絡を受け、慌てて病院へと駆けつけた彩海。白いベッドに寝かされ、様々なチューブに繋がれた、彩海の母親。ようやく目を覚ました時、彼女は誰よりも愛しい息子の手を取り、一言。

私のために、あなたの夢を諦めちゃダメ。私も父さんも、彩海を、そんな諦めのいい子に育てた覚えは無いもの。

虚ろながらも、意志の強い瞳で、あの時彩海は母親から、そう言って迫られてしまったのだ。周りがどう言おうとも、彩海の信じることをやりなさい、と、少し厳しい口調で、言いつけられたのだ。「母さんと、僕は僕の目標に向かって頑張るって、約束したんだ。その代わり、母さんは母さんで、必ず元気になる、ってね。まあ、今回のコンクールは、第一の目標に過ぎないけど」

君も大叔父から、こういう話、聞いてるだろ？

問われて、美言は静かに頷いた。彩海の抱える事情については、

ある程度、司教から聞かされている。

「僕の最終目標は父さん、さ。遠い目標だとは、わかってるけどね。でも、僕は父さんの絵を見て幸せそうに笑ってた人を、沢山知ってる。小さい頃から、ずっとそうだった。母さんだって父さんの絵を見て、凄く幸せそうに笑うんだ。確かに父さんは、収入も安定してなかったから、身内からは散々言われてたみたいだけど」
でも、

「父さんは、人の笑顔だって俺の収入なんだ、って、自慢気に笑ってたよ。僕も母さんも、そんな父さんを、誇りに思ってる」

……そっか。

彩海の話を受けて、美言は静かに、膝の上で手を結んだ。

「彩海君は、強いんだね」

彩海君は、弛まなく、努力を続けていくことのできる人。夢を持つて、生きることのできる人。

そうして、

ちよつと無愛想だけど、誰かを深く、愛することのできる……そんなヒト。

美言からしてみれば、彩海の今回の決心は、決して間違っではないのだろうと、そう思われてならなかった。彩海の決心は、彩海が本当に母と父とを愛しているからこそのものであったのだろうと、そう感じる。

ただ同時にこうも思う。彩海の、その決心は、

きつと簡単に、できたものじゃないよ。

美言だったら、もし、先生がそんなことになっちゃったら。もし、先生がそういうことを望んだとしたら。先生の言葉なんて聞かずに、先生の望みなんて無視して、ずっと先生の傍にいたいと思うかも知れない。

どちらの選択が、間違っているとも思わない。どちらもどちらで、正しい選択だと思う。

美言には、彩海のような選択はできないのかも知れない　と、美言はふと、そのようなことを考える。どちらの選択も、おそらく間違ったものではないのだろうが、ある意味、より大きな決意を必要とするのは、彩海の採った選択の方であろう。

「さて」

やおら、彩海は両手を叩いて払うと、すつくと立ち上がった。

「ご馳走様」

素っ気無くそう言い残すと、再び、キャンバスの方へと向かって行く。

「……あ、ううん」

気がつけば、布の上にあったクッキーは、全て無くなってしまっていた。

美言の意識も、はっと現実に取り戻される。我に返ったかのように、美言はその布を片付けると、再び彩海のいる方へと向きなおる。椅子に腰掛け、彩海はもはや、キャンバスの上に鉛筆を滑らせていた。

こうなれば、彩海は自分の世界に引きこもってしまつて、中々美言の言葉に応じてくれない。

美言は小さな鞆を開けて、布をそつとしまい込んだ。と、その手に、硬い感触が当たる。

いつも魔法の練習に使っている、あの木の枝であった。

二つとも取り出して、しげしげと見つめる。

視線を上げれば、キャンバスとコスモス畑とを交互に見遣る彩海の姿が見て取れた。

ねえ。君は本当に、頑張ってるんだね。

知らず、くすりと、美言から微笑が零れ落ちる。

彩海のその姿に、まるで勇気付けられるような気がしてしまう。

やっぱり美言も、頑張らなくちゃ、ね。

相変わらず、魔法は中々、上手くならないけど。

ねえ、そつ、彩海君。折角珍しく、君の方から色々話してくれた

のに、ごめんね。オトメにも、魔法使いにも、秘密がたーくさん。
だから、美言の目標はね、彩海君には、言えないんだけど……。

でもね、勝手に一緒に頑張っで行こうって。そんなことを、思っ
ちゃったの。……ねえ、こんなの、ダメ、かなあ？

第3章・C

時が、流れる。

月代の街からも、次第に緑が失われてゆく　その代わり、赤に、黄色に、と染められた世界が、次第に冬を迎える準備を始めていくかのようであった。

彩海の絵にコスモスが描き尽され、いよいよ、と言わんばかりにして、油彩絵具が彩海の持ち物に増えたのは、つい最近のこと。彩海と美言とが、偶にはコスモス畑の外で会うようになってから、暫くして、のことであった。

それまでに美言は、彩海のことを、自分の家へと招待したりもした。その日は、司教も呼ばれて、ルーカスも含めた四人で賑やかに夜の食卓を囲んだのだが、美言の作った夕食も、デザートプリンアイスも大好評であった上、食卓での話も弾み、また皆で食事を囲むという約束さえ、自然と交わされるほどであった。ちなみに、彩海とルーカスとも、その時初めて顔を会わせたのだが、どうやら意外なことにも、二人の相性はそれなりに良かったらしい。それからというもの、彩海は偶に、ではあれど、美言の家に顔を見せては、ルーカスと話しをするようになっていたのだから。

美言の家で、三人でお茶を囲むことも、何度かあった。逆に、司教の教会で、三人でお茶を囲む機会も、何度かあった。

そうこうして、楽しい日々は、あつという間に過去って行く。美言と彩海とも、知らぬ内に、今まで以上に打ち解けていつていた。それも、傍にるのが、当たり前と感ぜられるほどにまで。

そんな、ある日のことであった。

「……ウン」

「ん？」

「いや……何でも、ないよっ」

彩海から問いかけられて、美言は手に持っていた物を、慌てて後

ろに隠していた。

場所は、教会にある、彩海の部屋。事は、美言が、棚の上に置かれていた古びた彩海の筆を手にとった時に起こった。

どうしよう、先生。

「あ、そ。……で、君は、僕の部屋なんかに来て、どうするつもりなんだい？」

「いいじゃないっ！ 折角だから、ちよつと来て見たかっただけっ」

「まあ、元々ここに住んでたわけじゃないから、荷物くらいしか無いけど。……ランプでも、やろうか？」

「ううん、チェスがいい！」

「意外と君、趣味が渋いんだね」

「先生が教えてくれるんだもん」

「ああ、なるほどね」

じゃあ大叔父から、チェスセット、借りてこようか。

言つて踵を返した彩海の姿を見送つて、美言はこつそり、後ろに隠していた物を目の前に掲げた。

鼓動が、早くなる。間違い無くそこにあるのは、一本の筆であつたのだから。

折れていたのだ。確かに美言が先ほど手に取ったものは筆であつたが、その筆は先ほどまで、二つに折れていたのだ。

……どうしよう。

どうしよう、先生。

ここ数ヶ月、ずっとずっと、魔法が上手くならなくて、悩んでいたのに。

その出来事は、あまりにも唐突過ぎであつた。何の覚悟もできていなかった、というのにも関わらず、成功は、ある日突然美言を訪れたのだ。

何事も無かつたかのように、美言はその筆を棚の上に置きなおすと、自分を落ち着かせるべく、大きく深呼吸をする。

もう一度、古びたその筆に、指先を触れさせた。先ほどまで二つ

であつた筆の柄の繋ぎ目など、そこにはまるで存在していなかった。
成功、しちゃった。

ついに、やり遂げてしまった。

ねえ、先生。

美言ついに、できちゃったよ。

何ヶ月もかかったけど、

美言やっと、先生に、美言の目標に、また一歩近づけたような気分、だよ……？

第4章 - A

あの日から。

美言の魔法は、今までからは考えられないほどに、急激に上達を始めていた。

「それにしても、美言は本当に、今日は高く飛んでいらっしやりましたものねえ。絶好調、……な感じですか？」

その上達ぶりは、美言が幕に跨れば、今やかなり高く、速く空を飛ぶことから見て取れる。

空を飛ぶ、などと。

これこそまさしく、御伽話的に思われがちなのであろうが、魔法使いにとって飛行は、割と当たり前にこなせることの一つであった。空気の質を変化させることによって、魔法使いは空を飛ぶ。つまり空を飛ぶという行為は、単に空気に対して干渉を加えている行為に過ぎないのだ。

いつもの書斎、安楽椅子の上のルーカスは、傍で机に向かっている美言を微笑まし気に見つめながら、膝の上に乗せた本をぱらりと捲る。

美言は今、机に向かって魔法の勉強中であった。ルーカスに声をかけられても、比較的真面目な表情を崩そうとはしないと。

「ねえ、先生？」

からり、と鉛筆を机の上に置き、美言が唐突に本から顔を上げたのは、それから暫くしてのことであった。

「何ですか？」

美言はルーカスの微笑を受けて、うーん、と小首を傾げると、
「どうして美言、彩海君には好きだよーって、言えないんだろっね」
あまりにも唐突過ぎる言葉を口にした。

どうやら、美言の頭を真剣に悩ませていたのは、魔法、ではなく、

彩海の方であつたらしい。

なんでだろう。

そのまま、顎に手を当てて、じっと考え込んでしまう。

例えばね。

美言、先生には今すぐにだって、好きだよって、きちんと言えるのに。

司教様にだって、大好きだよって、言うことができるのに。

それなのになんで、彩海君にだけは、そうやって言えないのかな？

「言えない、とは？」

「……わかんない。でもね、なんかこう　言っちゃあ、いけないような気がする」

どうしてだろうね？

説明を求められて、逆に、更に問いを重ねてしまった。

……駄目だよ。

自分でも、わからないことだらけだ。

「美言はね、彩海君のこと、嫌いじゃないの」

ええ、とルーカスが頷く。

「美言はね、彩海君のことも、だーい好き、だよ」

美言が、言葉を続ける。

「でも、彩海君には、好きだよって、どうしても言えないの」

胸の辺りに手を置き、ほっと一息吐いた。

ねえ、先生？

「でももしかして、美言は、彩海君のことが、嫌いなの？」

そんな馬鹿な。

「その答えは、美言自身が一番よく知っていらつしやるでしょう？」

そんな可能性については、考えるだけ無駄というものでしょう。

美言による、美言への問いに対する答えを即座に口にすると、ル

ーカスは美言の頭にぽん、と軽く手を置いた。

そのままにつこりと、微笑みかける。

「ねえ、美言」

「なあに？」

「一つ、お話を聞かせて差し上げましょうか？」

「うんっ」

手近にあった棚の上に本を置き、頷いた美言を手招きして、自分の膝の上に座らせる。

無邪気に喜ぶ少女のぬくもりは、心なしか、今までよりも少し重さを増しているように感じられた。

……こんなにも。

こんなにも、いつの間にか、大きくなられてしまつて。

その分伸びた体を、後ろからふわりと抱きしめると、

「私にも、そういう時期がありました……と、思ひましてね」

「そうなの？」

胸の下で合わさつたルーカスの手に手を重ねながら、美言が意外と言わんばかりに問うてきた。

「ええ」

ルーカスはその暖かさに瞳を細めつつ頷くと、

「私もどうしても、言えなかつたんです」

もう、今から何十年も前の話になる。今は亡きルーカスの妻と、自分とが出会つたばかりの頃のこと。

「……私には、あなたの他に家族がいるんですって、そういう話は致しましたでしょう？」

「うん。奥さんと、娘さん、だよね」

二人とももうこの世にはいませんけれどね。今でも二人は、私の大切な家族なんです。あなたと、同様にね。

そうルーカスが美言へと話したのは、何も遠い昔のことではない。美言が、ルーカスの手へと自分の指を絡める。

その時のルーカスの寂しそうな表情を、美言はよく覚えていた。だからこそ。

「ええ。私もね、そうだったんですよ。妻と出会つたばかりの時、いいえ、結婚してからでさえ。どうしてもあの人に対して、中

々好きだと、言えなかったんです」

ルーカスが、妻と娘とをどんなに大切に想っていたのか。美言はそれを、よく知っている。

「でも先生は、奥さんのこと、愛してたんでしょ？」

「ええ、勿論です」

「でも、好きだって、言えないの？」
どうして？

「……嫌われるのが、怖かったのかも知れません」

問う前に、答えてくれた。

嫌われるのが、怖い？

「或いは、言葉では表現できないくらいに、彼女を愛しているからかも知れません」

言葉では、表現できないくらいに？

ルーカスの話が、少しだけ、美言の次元よりも高い所で展開されているように思われてならなかった。

……そりゃあ。

美言だって、恋愛小説とか読むし。 正直、お友達同士で、そういうオトナのザッシとか、まわしっこしたことがないわけじゃあ、ないけれど。

でも。

「大好きって言葉で表現できないくらいに、大好きなの？」

「言葉に、しっちゃあいけないような気がするんです」

先生のその言い分が、わからないわけじゃあない。でも、

「でも、言葉にしなきゃ、わかんないよね？」

「ええ、その通りなんですよ、美言」

ルーカスはすんなりと頷くと、

「でも、わかっていても、やっぱりどうしても言えないんです。考えれば考えるほど、好きだって、言えなくなるんですよ。……言っ
てしまいたいって、言わなくちゃあいけないのかも知れないって、
わかっているはずなのに」

しかし、意思に反して、どうしても本心が、口について出てこないのだ。

それをあの頃の自分は、どれだけでもどかしく思っていたことか。
「私の妻は、随分と積極的な女性でしてね。むしろ形的には、私が言い寄られた方なんですが、」

珍しく、ルーカスは照れ笑いを浮かべた後、美言をもう少し強く抱きしめなおすと、

「私の方は、この通り小心者なものですから。どうしても、彼女に好きだと、言えなかったわけです」

静かに息を吸い込むと、美言の髪から、甘い花の香りが感じられた。

……そう。

思い返せば。

少し子供っぽい彼女は、年相応には見えなくて。丁度今の美言が、もう少し大きくなったくらい年頃にしか見えなくて。

彼女はいつまでも、結婚してからも、娘が生まれてからも、ずっとずっと、無邪気な女性であつた。

ねえ、ルーカス。私はね、ルーカスのことが、大好きよ。

あなたの傍に、ずっといたい……駄目かしら？　ねえ……。

記憶の中で、妻が微笑む。

「愛しているんですよ、彼女のことを。けれど、色々都合をつけているうちに　そう、中々言葉には、できなくなってしまうって。彼女が私のことを嫌いになるはずもないし、愛していますよ、好きですよ、って言葉を、きっと彼女は喜んでくれるだろうって、わかっていましたのに。どんなに言葉以上に彼女を愛していても、やはりそれを言葉にするには、愛していますよ、好きですよって、言わなくてはならないことを、わかっていましたのに」

だから、少し後悔しているんです。

体の力を抜いて、そっと体重を預けてくる美言の耳元で、優しく言い聞かせる。

「もっと、彼女を安心させてあげることができれば良かったのに……と、ですね」

或いは、彼女は手探りであつたのかも知れない。言葉をくれないルーカスの愛情表現を、どう捕らえたら好いのか、わからなくなることもあつたのかも知れない。

言葉にしくなくても、表現できることは沢山ある。だが言葉にすることによって、彼女の不安を、取り除くことができたのかも知れない。

そう、わかつてはいても。

好きですよ。

愛しているんです。

口にしたことが無かつたわけではないが、言いたい時に、口をついて出てくる言葉ではなかつたのだ。

「ねえ、美言」

「なあに？」

「私はあの人に対して、中々愛しているだなんて言えませんでしたけれど。それでもずっと、今でも、あの人のことを、紛れも無く愛しているですよ」

「……うん」

そんなわけがないとわかつてはいても、嫌われることが怖くなつてしまうほどに、言葉にできないほどに、大切に想っている。

それは、大切な言葉を言えなかつたことに対する逃げの言い訳でもあるのかも知れないが、自分が臆病にならなくてはならないほど、躊躇しなくてはならないほど、彼女を愛しているということの、裏返しでもあつたのだ。

ですから、美言。つまり、私の言いたいことは。

「美言はそれだけ、彩海君のことを、好きなのではありませんか？」

「美言が、彩海君のことを？」

「そうです。……特別、なんじゃありませんか？ 一番、ですとか」

「特別？ 一番？」

きしり、きしり……と、二人を乗せた安楽椅子が揺れる。

美言は少し驚いたように、

「美言はね、先生のことが、一番大好きだよ。勿論、パパとかママとかも、一番好きだけど……」

「それは、嬉しいですねえ。……でも、そういう好き、と、彩海君に対する好き、とは、もしかしたら、違うものなのかも知れませんか？」

そういう意味で、あなたにとって彩海君は、特別、なのかも知れませんか？

付け加えて、美言の髪をすりと撫でる。

美言も自分の長い髪を、指先に絡めて遊ばせていた。

「……そう、なのかなあ？」

「そうかも、知れませんが」

「へえんなの……」

納得いかないよ、と、言わんばかりに、美言が口を尖らせる。

そんな弟子の 否、娘の様子を、父親はどこか微笑まし気な、しかしどこか寂し気な色の混じった視線で見守っていた。

第4章 - B

このキャンバスの世界が、秋桜で満開になった頃には。

母さんは。

元気になつて、いるのだろうか。

初めてここに来た時にも沢山咲いていた花々が、その数を、更に増やし続けて一ヶ月近く。元々は真っ白であったキャンバスの上に、大まかな色が散りばめられ始めてから、暫く。

絵は、次第に完成へと近づいて行く。時は音をたてずに、だが、確実に流れて行く。

いつものようにキャンバス立てに向かったまま、コスモス畑の中で、彩海は静かに溜息を吐いた。

……やれ。

母さん。

僕は母さんに言われた通り、全力で、頑張っている。 つもり、

だけど。

でも。

何かが、足りないような気はする。

キャンバスをじっと見つめて、もう一つ、溜息を吐いた。

元々、題材が見つからない、見つからない……と困っていたことを、ふと思ひ出す。あの時は、軽いスランプであったのだろう。この場所に美言によって導かれるまで、彩海はどんなに素晴らしい景色を見ても、どうしても、それを描く気にはなれなかったのだ。

今まで描いた絵の中でも、この絵の出来は、決して悪い方だと思わない。むしろ、出来栄えとしては、今の時点ではかなり良い方だとさえ思う。題材が題材だけに、それこそ、美言曰く、相手が”本物の自然”だけあって、コスモス畑は、彩海に対して強い想像力をもって迫ってくるのだ。

それでも。

どう、しようかな。

小さなテーブルに、手にしていたパレットと筆とを置き、彩海は背を反らしてキャンバスを見遣った。

決して満足はいかないのだ。

気のせいかな、何かが、足りないような気がする。

母さんも、父さんも。それから、この絵を見る、沢山の人も。喜んで、くれるのだろうか。父さんの絵を見た時のように、嬉しそうに、楽しそうには、してくれるのだろうか。でもそれには、何かが足りないような気がする。気のせいかな、これじゃあ、いけない気がする。

父の言葉を借りるのであれば、そう、

見えない、何かが？ 足りない、ような……？
と。

彩海君っ！ と。

聞き慣れた声音で、呼びつけられたような気がした。もう間もなくして、小さな足取りが近づいてくる。

美言。……もう、そんな時間か。

美言が来る時間、と言えば、大体は昼過ぎであることを、彩海はよく知っていた。

「ねえっ、彩海君っ」

彼女は珍しく挨拶も無しに彩海に駆け寄ると、相当急いで駆けて来たのであろう、途切れ途切れな息を、しかし整えようとせず、

「おめでとう！」

ぱつと、一言口にする。

「おめでとう！ 彩海君っ！ ねえ、聞いてよ！」

美言はコスモスを踏まないように細心の注意を払いながら、ようやく辿り着いた彩海のすぐ後ろで立ち止まると、満面の笑みを咲かせ、

「お母さん退院できるんだって！ 彩海君のお母さん、退院するんだよっ！！」

「え？」

あまりにも唐突で、意外過ぎる言葉に。

「何だつて？」

そりゃあ、母さんが比較的元気だ、って話は、聞いていたけど。

……退院することになった？

彩海は一瞬、言葉を失ってしまう。

母さんが、退院？

「だから、お母さん退院するの！ もう一ヶ月もしないうちに、退院できるだろうって！」

司教様がね、彩海君に伝えてほしいって、美言に伝言をお願いしてきたのっ！

「……良かったあ！ ほんとうに良かったねっ！」
そうか。

「うん」

手放して喜ぶ美言に、彩海は意外にも、感情の薄い声で頷きを返した。

一言だけ、事実を確認するかのように付け加える。

そうだ、つまりは、

「これで僕は、また母さんと一緒に、暮らすことができるんだ」

「だねっ！ でもほんとうに良かったよ！ おめでとう！ 彩海君っ」

美言には視線を向けずに、ぽつり、ぽつり、と続ける彩海の背に、勢い付いて美言が抱きついた。

美言としては、この喜びを、早く共に、分かち合いたかったのだ。親のいない悲しみを、美言は嫌でも知ってしまったている。ゆえに、両親を亡くした美言にとって、彩海の母親が元気になったのだという朗報は、我が身に訪れた喜びのように嬉しく感じられた。

ねえ。

彩海君には、パパもママもないだなんて……、そんな悲しい想い、してほしくないよ。

ただでさえ、彩海も父親を失い、親のいない悲しさというものをわかつているはずなのだ。その悲しみが二つになってしまふことなど、

あまりにも、辛すぎるよ。

だから。

彩海に抱きついたままで、美言が瞳を閉ざす。

「本当に、良かったあ……」

彩海を包む力を強めて、そつと息を吐く。

良かった。

彩海君はこれで、悲しまずに、済むんだね。

大好きな人の悲しむ姿など、見たくはない。ルーカスの悲しむ姿も、司教の悲しむ姿も、　　そうして、彩海の悲しむ姿も、見たくはない。

大切な人には、いつも笑っていてほしいから。

幸せが、好き。それはきつと、誰にとっても同じこと。美言にとつては、大好きな人が笑っていてくれることが、本当に幸せなこと
で。

「うん」

しかし、時が経つても彩海の反応は、美言が予想するよりも、ずつと冷静なものであった。

美言の重みを感じながら、彩海はそこから、動こうとしなかった。ただ真つ直ぐにキャンバスを見つめ、着け始めたばかりのコスモスの色を、一つ一つ、上の空で確認してゆく。

……この赤は、少し濃すぎるかな。

彩海の心の中には、そんなどうでもいいような呟きがあった。

流石にその様子を疑問に感じた美言が、ぽつり、と彩海に問いかける。

「嬉しく、ないの？」

それでも、彩海は美言を振り返ろうとはしなかった。

美言の手が、彩海から離れる。

「どうしたの……？」

もっと、喜んでくれるものだばかり思っていた。今日は彩海に、とびきりの朗報を持つてくることができて良かったと、そう思っていた。

ふと、美言の視線が、キャンバスの上に留まる。

出会ったばかりの頃は真っ白であったキャンバスの上に、今は鮮やかに色づく世界ができつつあった。

美言と同じ場所を見つめながら、ようやく、彩海が小さく口を開く。

「美言」

「なあに？」

「もうあまり長く、月代にはいられないんだろうな」

「あ……、」

「母さんが、元気になったから。僕は、母さんが退院するまでに、帰ろうと思う。……東京に、帰るんだ」

もうこの絵に色を乗せ始めている以上、仕上げは、東京でもできること。確かに景色を目の前にして描いた方が好いことに変わりはないのだろうが　いやむしろ、幻想的な要素を付け加えるのであれば、原物を目の前にしない方が好いこともあるのかも知れない。尤も、彩海はこの絵をどのように完成させるかは、まだ決めていないのだが。

その瞬間、妙に冷静な理解が、美言の中を駆け抜けた。

そうだ、よ、ね。

そうだよ。

美言が、背中できゅっと自分の手を結ぶ。

彩海君のお母さんが元気になって、また彩海君が、お母さんと一緒に暮らせることになった、っていうことは。

「とう、きょう？」

かえる？　とうきょうに？

この国の、首都の名前。この県の隣にある、日本でたった一つの

都の名前。

隣だなんて。

近いけど、でも、とても遠い。

だってそれって、

「月代から、いなくなっちゃうの？ 彩海君……、」

もう美言は彩海君に、毎日は会えなくなっちゃうってことでしょ

……？

当たり前のことを問うて、美言はぼんやりと、彩海を見つめた。

振り返ってはくれない、彩海の背中。

……こんなにも。

今はこんなにも、触れられそうなくらい近くにいるのに、美言は彩海君に、もう、会えなくなっちゃうの？

そんなの、

「そつ……かあ……、」

いつか来る日だとは、確かに、わかってはいたような気がする。しかしそれでも、

そんなの、唐突過ぎるよね……？

しかし。

思ったことを、美言は決して口に出そうとはしなかった。

無理やり笑顔を浮かべると、

「でもっ！ 良かったじゃないのっ、ね？ またお母さんと一緒に暮らせるんだよ？ 彩海君は……ねえ、」

ねえ。

良かったじゃない……ね？

言う代わりに、美言は両手を、彩海の両肩へと置いた。

その上から、彩海の左肩へと、軽く頭を乗せると、

「美言は……嬉しいよ」

嬉しいよ。嬉しいんだよ。本当だよ、彩海君。

けれど、どうしてだろう。

嬉しいはずなのに、美言はどうして、素直に笑えないんだろう。

悲しいことが、あったわけじゃないのにもかかわらず。
美言ったら、ちよっとおかしいよね。

心の中で、自分自身を笑い飛ばす。おかしいね、そんなの、と、くすりと笑う。

秋が、流れる。

その響きに、彩海のパレットから漂う、絵の具の匂いが混じり込んだような気がした。

秋桜が、揺れる。この世界と、彩海の描く世界とで、秋桜が静かに揺れる。

暫くの、沈黙の後。

「おめでとう」

彩海君。

その沈黙を破り、瞳を閉ざしてようやく囁いたのは、美言であった。

その声音に、しかし彩海は応えない。

彩海は黙ったままで、美言の暖かさを感じていた。

甘い、花の香りがする。

その香りを、心地良く吸い込んで、

「……ありがとう」

ぽつり、と、彩海も呟いた。

けれど。

違う。

僕が美言に言いたいのは、こんなことじゃあなくて。

静かに答えてから、彩海は自分の言葉にはっと後悔の念を感じていた。

自分には、もっと美言に対して言うべきことがあるのではないか。今自分が美言へと言うべきことは、こんなことじゃあない。

こんなことでは、なくて。

「うん、おめでとう」

震えを押さえた声音が、心に響く。

美言。

どうしてか、今日は美言が、いつもよりも近い存在に感じられてならなかった。いつも傍にいてくれた彼女が自分にとってこんなにも暖かい存在であったのだと、彩海はこの時初めて、切々と深く感じていた。

しかしこの暖かさは、もうすぐに、過去って行ってしまうに違い無い。

それでも彩海は、言いたいことを、本当に自分の言いたいことを、彼女に伝えることはできなかった。

それどころか、彼女の方を振り返ることすら、できずにいた。

第4章・C

先生になったような、気分。

美言のだーい好きな先生に、なったような気分。

きしり、きしり……と、いつもはルーカスが座っているはずのあの安楽椅子を揺らす美言の膝の上には、一冊のノートが広げられていた。

そこには、美言にとっては見慣れた筆記体で、イタリア語がびつしりと書き綴られていた。先生が、魔法の基礎知識本を、わざわざ美言のために翻訳してくれたもの。

このノートが手渡されたあの日、何でイタリア語にしたの？と美言から問われ、日本語は書き難くて……と、笑っていたルーカス。彼は今、台所に立ち、美言の代わりに夕御飯の準備をしているはずであった。そう、美言の、代わりに。今日の夕御飯の当番は、美言であったというのにも関わらず。

……美言、先生になったみたいだね。

思いながら、美言は椅子に深く腰掛ける。椅子に揺られて、瞳を細めた。

開け放った窓から入り来る風が、少し冷ややかに心地良い。暮れ始めた世界の中で、部屋には長く影が落ちていた。

美言の視線は、例のノートにあった。しかし、そのノートは父方の母国の言葉で書かれているというのにもかかわらず、美言には内容が全く理解できなかった。

先生……。

紅く、暗い世界では、もはや明かり無しでは、ノートの字など見えるはずもなかった。

美言は、そんな単純なことにも気がつけずにいた。それどころか、自分が今、何をしていたのかということにも、気がついていないようであった。

きしり、と音をたてて、安楽椅子が深く沈む。

美言の瞳が、ぼうつとして、天井のシャンデリアを見上げた。

……ねえ……。

「美言、おかしいよね……？」

美言が、美言じゃあ、ないみたい。

誰にともなく、呟いた。ここには誰もいないのだ、とわかってはいても、誰かに聞いてほしいかのようにして、思わず呟いてしまっていた。

ねえ。

どうしてだろう。

色々と、おかしいよ。ね？ そうだよ。

変だよ……。

「おかしいよ……」

自分のことのはずなのに、どうしても、自分がわからない。

美言は深く息を吐くと、そのまま静かに、瞳を閉ざした。

あの日からは。

彩海が母親の回復を知ってから、一日が経過していた。

今日、美言は、この家から一歩も街に出ることなく過ごしていた。勿論、森のコスモス畑にも行ってはいなかった。

そうして、徐々に打ち込んでいたのだ。今日は偶々暇であったルーカスから指導を受け、魔法の練習に励んでいた。

朝食の後は、机に向かって勉強。昼食の後は、実技の練習。しかし、

「美言は……」

その異変は、昼間に起こった。

……どうして？ と。何で？ と、真昼の庭で、ルーカスを目の前にした美言は絶句せざるを得なかった。

空を、飛べなかったのだ。こうすれば魔女さんみたいだねっ、と、いつものように、お気に入りの箒に跨り、意識を集中した美言ではあったが、箒は全く、ぴくりとも、美言の意思に反応してくれなかつ

ただ。

今までは、そんなこと、なかったのに。

そんなはずはないと、自分を励まし、何度やっても、結果は同じであった。あまりにも唐突すぎる事態に、暫く言葉を失っていた美言は、ルーカスの言葉を受けてようやく混乱する心を押し静めることができた。

そういう日も、ありますよ。美言は普段から、頑張り過ぎなんです……ですからたまには、今日くらいは、ゆっくりとお休みなさい、ね？

「魔法が、使えない……？」

それでも諦めきれなかった美言は、自室に戻り、あの日コスモス畑にクツキーを持って行った時の鞆の中に入れっぱなしであった、木の枝を二つ取り出した。

いつもの要領で、意識を集中させる。元に戻るように、また一本になるように……と、手に持ったままの枝へと意識を集中させた。

いつもであれば。

いつもなら、そのくらいのこと、簡単にできるはずなのに。

けれど今日は、やはり、木の枝でさえ、美言の言うことを聞いてはくれなかった。

そうして、今。

逃げ込むように、ルーカスの書斎に入り込んだ美言は、膝の上にノートを広げ、今の今まで今のようにして、時間の流れすら忘れて、ぼんやりと様々なことに意識をめぐらせていた。

今日、突然、魔法が使えなくなった。

それは美言にとって、あまりにも突然過ぎる事件で。

「どうして……？」

今までこんなこと、なかったのに。

魔法が、使えなくなった。

理由もわからない。心当たりも無い。

ただルーカスは、そういう日もありますよ、と言う　でもどう

して、

どうして、突然こんなことになってるの？

今日の自分は、昨日の自分と何が違っているというのであろうか。
……単に、美言が疲れてるだけなの？ だから、魔法が使えなくなるの？

美言にとつては、わからないことだらけだ。

「どうしてなの……？」

誰にとも無く、もう一度問いかける。

流れる風に、膝の上のノートの頁が、ひらりと一枚捲られる。

黄昏時の世界。もうすぐ、夜になる世界。暗くなる空。その空に、月は今もたった一つで、輝くというのであるうか。

きしり、きしり、と、美言が安楽椅子を揺らす。まるで、いつもルーカスがそうしているかのようにして、椅子の背に深く身を預ける。

ふと。

「あ……、」

その時々々、美言の目に、甘い香りの影が留まった。

棚の上に飾られた、一つの花瓶。いつも美言自身が花を飾るその花瓶に、今はもう、あの紅色のコスモスの姿は無い。

けれど。

森の奥の、香りが、する。秋の花に紛れて咲く、あの時 初めて彩海をコスモス畑に案内した日に摘んだ、あの、紅いコスモスの残り香。

秋桜の、香り。そこに、絵の具の香りの幻影が混じり込む。

美言の口が、きゅっと結ばれる。

どうしてか、その時から、しきりに彼のことがばかりが思い出されて、ならなかった。

……彩海君……。

彼は今日も、あのコスモス畑にいたというのであろうか。

「彩海君 ……、」

ねえ。

ねえ、もうすぐ美言は。

もう君には、会えなくなっちゃうの

？

第5章 - A

「彩海君、東京に帰られるんですってね？」

親友の 司教の住む教会を訪れて早々、そう口にしたルーカスは、客間のソファに深く腰掛けたまま、紅茶を一口し、

「それで、というワケでもないのかも知れませんが、まあ、とにかくにも、実は美言は先日から、魔法を忘れてしまいましたが……本人はかなり、ショックを受けていらっしやるようですが」

「魔法を、忘れた？」

比較的ゆつたりと告げられて、テーブル越しにルーカスに向かい合っている司教の方が、驚いてしまった。

珍しく、おじさんの方から教会にやって来たと、思ったら。

司教の反応など、まるで気にかけてもいないかのように、ルーカスはするりと言葉を続ける。

「あの子はもう……というか、まだ、と言っべきか。とにかくにも、一六歳ですからね」

だから？ と問うのは、この場においては、意味の無いことであつた。

司教は魔法使いの世界を知るべき者ではなかったが、事情あつてその世界を深く知ってしまったている。その上、司教とルーカスとの付き合いは、実は司教がまだ子供であつた頃からのものなのだ。尤も、その頃から、ルーカスの姿は相変わらずのものであるのだが。

勿論司教は、ルーカスが、そうして美言が、魔法使いであることを知っている。そうして、魔法使いがいかなるものであるのかも、正しく理解していた。

美言は、一六歳。そう聞いて、司教も一瞬、ぴたり、と、持ち上げたティーカップを口元で止めていた。

つまりは、

「"そう"、なんですか？」

「ええ、私が見たところ、”そう”なんですよ、司教」

ルーカスは深く頷くと、

「あの子の成長期は、まさしく今なんです。あの子の魔法使いとしての実力は、今、決まるんですよ」

つまり今は美言にとって、魔法使いとして、最も大切な時期なのだ。

「普通、魔法使いとしての実力は、大体十代前半から半ばまでに決まるものですからね。感受性が最も豊かなこの時期に、魔法使いは多くのことを学んでおかなくてはならないわけです……しかし逆に、この時期に成長できない魔法使いは、魔法使いとしてやってはいけないですよ。成長期を終えると、どんな魔法使いでも、必ず能力の減退期を迎えますからね。そうしてその状態で、魔法使いとしての実力が安定するわけですから」

「なのに美言ちゃんは、彩海のことを、どうやら好きになってしまったらしいと？」

まるで、話の本筋とは関係の無さそうな発言をした司教へと、しかしルーカスは一つ頷いて見せると、

「おや、司教も、ご存知でしたか」

「ご存知も何も、美言ちゃんを見ていれば、そんなの、一目瞭然です。私だって、もう年なんですから」

「まあ、美言自身はわかっていなかったようですが、いずれあの子も、自覚することでしょう」

どうして美言、彩海君には好きだよーって、言えないんだろ
うね。

先生大好き。司教様大好き。美言の口癖は、しかし、彩海に対してだけは出てこない。

なんでなのかなあ、と、考え込んでいた美言。美言はまだ、ルーカスや司教に対する好き、と、彩海に対する好き、との違いに、気が付いていないらしい。

美言は、彩海をただ”好き”なだけではない。”好き”、という

気持ちに加えて、彩海に恋心を抱いているに違い無い。

それを踏まえて、ルーカスが言う。

「どんな魔法使いでも、誰かを特別に愛してしまえば。大体は、魔法使いとしての能力が減退してしまうものなんですよ。……人によつては一生それを引き摺りますし、まあ、私みたいに、一時的な現象で済む人もいますけれどね」

恋に堕ちた魔法使いが、必ずしも、魔法の力を失うわけではない。むしろその恋を、愛を力の抛り所として、魔力を強くする魔法使いも、いることには、いるのだ。

いずれにしても、恋とは、愛とは、不可解なもの。どんなに偉大な魔法使いが、どんなにその海の中でもがいてみても、結局はもがけばもがくほど、深遠な感情の波に絡まれ、沈んでゆくばかりであるかのように。

どんなに実力のある魔法使いでさえ、それをどうにかすることはできないのだ。それが恋であり、愛たるものと、ルーカスは身を持って知ってしまったている。

「魔法使いが、一人で生きていきたがる理由ですよ。どの道魔法界では、慣習的に恋愛がタブー視されているわけですからね」

何かを懐かしむかのうように、細く息を吐いた。

何と無しに、眼鏡を押し上げて、

「私達にとつて、心の安定はなによりも大切なものです。恋とか、愛なんて、そんなもの……揺れて、揺れて、どうなるかわからない。そんな不安定な状況に身を置きたがる魔法使いなんて、基本的にはいるはずがないんですよ」

一般的に、魔法使いは皆、自分が魔法使いであることに、誇りを持って生きているのだから。

常人には無い、魔法使いの能力。自ら進んでそれを捨てようとする魔法使いなど、基本的にはいるはずがない。

ルーカスが口にした通り、魔法使いにとつて精神を安定させておくこととは、魔法使いとしての命を保っていることとほぼ同義にな

ることであつた。揺らぎ無く、真つ直ぐな強い心のみが、目には見えない世界を動かし得るのだ。

「でも」

ルーカスは首筋に手を当てると、そこにあつた、光沢の薄い細い鎖を指先に引つ掛けた。

軽い音をたてて服の中から出てくるペンダントトップを、手の平の上に乗せると、

「愛とはやはり、不可解なものですから」

ペンダントの蓋を、そつと開いた。

その内側にはめ込まれた、色褪せた小さな写真。その小さな世界の中で、女性と男性と、そうして小さな少女とが、手と手を重ね合わせて微笑みを浮かべていた。

ああ、

「あの時私は、魔法使いとして一生を全うしよう、って、そう思つて、毎日を一所懸命に生きていたはずなのに。あの人に一瞬微笑まれただけで、そんな何十年来の決意が、どうでもよくなつてしまつたんですよ」

写真の中に、眠る過去。

愛しい、愛しい、あの女性。言葉にすることすら馬鹿らしく感じられるほどに、本当に、本当に愛している。

……ですから。

もし一瞬でも、この写真の時間に、戻ることができるのであれば、もし、自分の気持ちに一番近い言葉をもつて、彼女を安心させることが、できるのであれば。

そう、つまりは、彼女を強く抱きしめて、口にするのが苦手だったあの言葉を、愛しているという言葉を、囁くことができるのであれば。

考えて、夢想してしまうだけで、彼女を抱きしめていたあの時と同じほどに強い望みと不安とを覚えてしまふのだ。

彼女は昔のように、

私へと、笑いかけて、くださるのでしょうかね。

溜息を、一つ吐き、

「彼女に出会う前まで、ずっとそう思っていました。安っぽい恋愛物語なら、いくらでも知っていたんです。でも私には、その気持ちがわからなかった。馬鹿らしいとさえ、思っていましたよ。……心のどこかで、私にはそういう想いをする機会なんて訪れないだろうって、そう決め付けていたんです。そう信じ込んでいた。でも、」

ルーカスは瞳を、写真から離そうとしない。

小さな写真の中から、三人の男女は無言のままに、こう語りかけてくる　ねえ、私達は、こんなにも幸せ、ね？

こんなにも、

そう、こんなにも、

「幸せなんです。彼女がそこにいてくれるだけで。今まではどうでも良かった世界が、こんなにも美しく思えてしまう。そんな美しい世界の中で生きていけるだなんて、私はなんて幸せなんだろう、って。……ねえ、司教。愛というものは、不可解なものなんです。彼女の存在に気付いた瞬間、私の中で全ての価値が変わってしまったんですよ」

そんなこと、あり得るはずが無いとっていましたのに。

ルーカスはやわらかく微笑むと、ペンダントの蓋をぱちんつ、と閉じた。

再び服の中に、抱え込むかのようにしてしまいなおす。

大切な、家族。

胸の内で微笑む、妻と、娘と、あの時の自分。

「　そのような想いを捨てると言われても、無理でしょう？　たとえそのおかげで、精神的に不安定な要素を得ることになったとしても、ですね」

愛しているのだ、今でもまだ。彼女がこの世から姿を消してしまっただけからでも、いまだに彼女を愛している。

そうして、相変わらず、世界は美しいのだ。彼女の愛した世界は、ルーカスにとっても美しい世界なのだ。

おそらく、これからずっと。

「悩んだり、痛い想いをしたり。捨てなくちゃあならないものだった。沢山ありました。そんな犠牲も、沢山ありますけれどもね。それと引き換えにしても、得ていたい幸せがあるんですよ。……思うにそれが、愛というものなのでしょう」

だから、私は。

そつと付け加え、ルーカスはティーカップを静かに持ち上げた。

甘い紅茶の香りが、心に穏やかさを広めてゆく。

「もし美言が、そのような幸せに出会うことができたとすれば。例えば彼女が魔法使いとしての生命を失うことになったとしても、それを止めようとは、思わないんですよ。今も、きつと、未来もね」

いいえ、思えないのでしょうかね。

紅茶を一口、そつと付け加えた。

もし今、このまま美言の魔力が回復しなければ、美言はおそらく一生魔法使いにはなれないであろう。仮にもし、今、魔法使いとしての力を取り戻したとしても、これはどの魔法使いにも共通することではあるが、未来にも魔力を失う可能性は付き纏う。その上ただでさえ、美言は夢見がちな娘なのだ。

しかし、いずれにしても。

ルーカスにとっては、大切な、娘のような、……否、娘である美言。できれば彼女も、自分と同じ、いや、或いはそれ以上の幸せを知る機会に恵まれますようにと、願うばかりであった。例えばそれが結果的に、魔法使いとしての生命を失うことに繋がろうとも。

……笑っていて、ほしいんですよ。

彼女には、幸せでいてほしい。あの屈託の無い笑顔に、ルーカスも何度助けられたことが。

ルーカスが思うに、美言の最も得意かつ最大の魔法は、あの笑顔なのだ。そうしてその魔法は、美言自身が幸せでなくては、成立し

ないのだ。

「……おじさんらしい」

不意に。

今まで黙ってルーカスの話を聞いていた司教が、くすり、と忍び笑いを洩らした。

ルーカスはあからさまに表情に戸惑いを浮かべ、

「そうですか？」

「ええ、とても。でも私は、正直少し嬉しいんです」

「嬉しい？」

「ええ」

問われて頷き、司教はチョコレートへと手を伸ばした。

包み紙を、ゆっくりと剥きながら、

「おばさんも、それから、あの子だって。それに、美言ちゃんも、おじさんにそれだけ愛されていて、本当に幸せだった、いいえ、幸せなんだろうなって、そう思うんですよ。……私だって好きな人には、幸せでいてほしいものですからね」

司教もルーカス達家族が、大好きなのだ。それは、あの頃からずっと、今でも変わらない。

だから。

「おじさんの言葉を聞いていると、皆幸せなんだろうなって……本当に、嬉しくなるんですよ」

「そんなこと、」

「ありませんよ、って言うのは、駄目ですからね？ 私は知っているんですから。おばさん達が、どんなにおじさんのことを大切に想っていたのか」

ルーカスのいつもの口癖を遮って、司教がそつと言葉を続けた。

「おじさんと出会えてよかったって、おばさんはいつも、そう口にしていましたから」

「ええ」

「それはおじさんもご存知でしょう？」

「……ええ」

自信の無さからか、歯切れの悪い返事をするルーカスへと、
「おばさんだって、おじさんと同じなんですよ。おじさんだって、おばさんに会えて良かったって、そう思っているでしょう？ おばさんだっておじさんに会えて、おじさんと同じくらいに幸せなんです。紛れも無い、事実ですよ。……勿論、美言ちゃんについてもね」
司教は微笑を深くすると、チョコレートを口の中へと放り込む。
その甘さを、紅茶で落ち着けて、

「いずれにしても、めぐり合わせとは、不思議なものですな。それだけで、誰かと誰かが幸せになる……、」

まあ、その逆もあることには、あるでしょうが、それはともあれとして、ですよ。

「どうか、美言ちゃんにとっても、彩海にとっても。二人の出会いが、良かったと思えるものになれば、良いのですけれどもね」

「ええ、そうですね」

頷いて、ルーカスがそっと、同意の笑みを浮かべた。

第5章・B

珍しくこんな時間に、街の中で出会ってしまった。

「……っ、」

彩海の姿を見かけた瞬間、どうしてか美言は、一瞬、呆然と立ち竦んでしまった。

昼時の、月代の、高台。長い、坂道。都会の見える場所、海の見える場所で、ばったりと出会った、美言と、彩海。

「こん、にちは」

「やあ」

立ち止まり、美言が頭を下げると、彩海は坂の下から軽く片手を挙げて、挨拶を返してきた。

出会ったばかりの頃とは違い、彩海も美言と出会えば、彼女を気にかけて、しっかりと立ち止まってくれる。

そんな彩海の姿を一瞥すると、美言は背中中で手を組み、きょとんと、心の中に浮かんだ問いを言葉にした。

「彩海君、今日は絵、描かないの？」

珍しく、彩海は何一つとして荷物を持っていなかった。あの重そうな油彩絵具一式も、スケッチブックでさえ、今日は一つとして手にしていない。

「ああ」

彩海は両手を肩の辺りまで挙げて頷くと、

「大叔父に頼まれて、ちょっと用事を済ませてきてね。絵は、これから描きに行こうと、」

思ってる。

続けようとしたところで、言葉が途切れた。

咳込んだ彩海に、美言が慌てて手を伸ばしかける。

「……大丈夫？ 風邪？」

「別に」

短く答えられて、美言は心残りを感じながらも、そつと手を下ろした。

彩海は咳をもう一つ、大きく溜息を吐くと、

「大したことない」

「だったらいいケド……でもなんか、疲れてるみたいだよ？　少し、休んだら？」

絵、描きに行かないで。

どうせ今日は美言も行けないしね、と心の中で付け加える。今日は、少し用事が立て込んでしまっているのだ。

「時間が、あまり無いからね」

「……うん」

「できるだけ、こっちで描いて行きたいから」

あの絵に、何が足りないのか。よく見て、聴いて、嗅いで、感じて、探しておかなくちゃあ、ならないだろうから。

「……そっか」

咳払い交じりに、彩海が言う。美言は小さく納得しながら、一瞬だけ視線を俯けた。

それから、いつもと同じ、笑顔を取り繕う。出会った時から変わらない笑顔を、彩海に向けて見せた。

「でも、良かったっ。彩海君の絵が、きちんと進んでくれてっ」

出会ったばかりの頃は、題材が無くて、彩海君ったら、困ってたんだもんねっ。

何はともあれ、彩海が目標に向かって進んでいてくれることが、美言にとっては本当に嬉しかった。

なのに、美言は。

「コンクールまで、間に合いそうっ？」

「おそらくね」

美言は進むどころか、後退しちゃってるんだ……。

ふと、そんなことを思ってしまった。心の中に過ぎった考えを、美言はすぐに、何とかして振り払う。

違う、今はそう言うコト、考えちゃダメだよ。魔法が使えないとか、何だとか、そんなコト、考えちゃダメ。

前向きに生きていくの。そういう時期もあるから大丈夫、って、先生、言ってたもん。

「そっか、ほんつとうに、良かったねっ！」

「まあね」

彩海は一つ頷くと、くしゃみを一つ。眉を顰めて、溜息を吐いた。
……何だろう。

それから改めて、美言を見遣る。大丈夫？ と心配してくる彼女に、大丈夫、と答えれば、彼女はいつもと同じ笑顔で、早く風邪、治さなくちゃねっ、と、元気を向けてくる。

だが。

どうしてか、ぱつとしない。まるでいつもの世界に、霞がかかっているような そんな気分。

そのまま他愛の無い話を続けていくうちに、彩海のその思いも強くなっていた。

美言は確かに、いつもの美言であった。しかし、何かが違うような気がする。

「君、ね、」

だから、問うてみることにした。

何がいつもの美言と違うとは言えないが、そうだ、強いて言うなら、美言の笑顔が、裏に何かを隠しているような……そんな、感じ。
「何か、悩み事でも？」

その指摘は、美言にとっては、あまりにも予想外のものであった。
どうして。

「何で、そう思うのっ？ やーだなっ、」

指摘されて、平静を装って、声音の音調を高くした。無理やり楽しい気分を作り出して、両手を広げて言葉を続ける。

「美言こんなにも、元気なのにつ」

「いやだって……、」

彩海はまるで、言葉を捜すかのようにして俯いた後、

「浮かない笑顔だから……、」

言い辛そうに、続けた。

静かな声音が、美言の心に強く訴えかけてくる。

「……そう、かなあ」

そんなハズないよ。

だって、街の人達と話したって、お友達と話したって、誰も美言に何かがあっただなんて、気付かなかったんだよ？

先生や司教様は、美言の事情を知ってるからともあれ　と。美言が、魔法を使えないことに対して、かなり落ち込んでいることを知っているからともあれ、と。

でもどうして、そういうコトを知らない、彩海君が。まだ出会ってから、一ヶ月くらいしか経ってないのに、彩海君が。

「そんなこと、ないのにな」

美言の気持ちに、気がついちゃうの？

それなりに、自信があつた。魔法の使えなくなったあの日から、確かに自分が落ち込んでいるであろうことは、美言自身、よくわかつていた。わかつていたからこそ、元気でいようと努めていた。いつもと変らない自分を演出しようと努め、その成果があがっているものと、自負していた。

だって、誰も気付かなかつたから。

ルーカスや司教はともあれとして、その他の人から、今のような指摘を受けたことなど、今まで一度も無かつたのだ。

美言は、いつもの美言のままであるはずであつた。よく笑う娘。

どんなことがあっても、元気な美言。なのに。

「美言は、元気、だよっ？」

えへへっ、と悪戯っぽく瞳を輝かせた美言の姿に、彩海は静かに、不信を積もらせる。

「……なら、いいけど」

行き詰った、笑顔。

ふと、そんな気がした。

一見して楽し気な美言の笑顔は、確かに出会った頃からずっと変らない、屈託の無い笑顔であった。それでもなぜか彩海には、今日の美言の笑顔が、

君、無理してる？

問いを、口にしかけて。都合悪く、咳に見舞われる。

美言が、顔を顰めた。

「大丈夫？」

それは、僕の台詞だ。

「無理しちゃ、ダメ、だよ？」

君こそ、だよ。

こほんっ、と最後に一つ咳をすると、彩海は何とか息を整える。

途端、二人の間に、沈黙が落ちた。

遠くから、時を告げる教会の鐘の音が流れて来る。ふと、顔を上げた彩海の視界に、この坂の下に広がる遠い世界の光景が飛び込んで来た。

美言も何気無く、彩海と同じ場所へと視線を巡らせた。

途端、

「ごめんねっ、今日は美言、これから買出しに行かなくちゃいけないのっ！ だから……また明日は、きつと行くよ！」

「……あ、」

美言。

何となく、彼女を引きとめようとした彩海の様子には気付かぬままで、美言は手を振って、街の方へと駆け出した。

それから、少し先で、くるり、と唐突に振り返り、

「あ、風邪、気をつけてね！ 絶対に無理しちゃダメだよ？ もうすぐ彩海君、また帰らなくちゃならないんだからっ！」

……帰らなくちゃ、ならない？

何気無く続けた言葉に、美言は一瞬だけ、はっと息を止める。

そっか、彩海君は、東京に帰るんだもんね。

当たり前のことを心の中で確認してから、美言は心を落ち着けるかのように、深呼吸を、一つ。

「じゃあ、またねっ！」

また、会おうね。

笑顔を咲かせて、街の方へと駆けて行く。

その後姿が坂道の下に隠れても、彩海は暫くの間、彼女の走り去った方を見つめていた。

花の香りが、遠くなる。

遠くで、海が光を散らす。青い風が、都会越しに、月代まで運ばれてきているかのようであった。

第6章 - A

「あれ……？」

あめ？

呟いたのは、どちらが先であつたのか。

ぱらぱらと、水滴が家の壁を打つ音が聞えてくる。 少し、薄

暗くなつたね。と、思つた途端、

これだもん……。

雨。

「なんか、ユウウツー」

美言は机の上で手を組み、その上に顎を乗せると、憮然と口を尖らせて呟いた。

「洗濯物は確か、今日は外に出していませんでしたよね？」

いつもと同じ、ルーカスの書斎。ルーカスは安楽椅子の上から、今日は魔法の教本ではなく、大好きな御伽噺を読んでいた美言へと、問いかけた。

「うん、大丈夫だったと思う」

窓の外を見遣つて、溜息を吐く。

折角、お姫様と王子様とは、もうすぐゴールインっ、……って、感じだったのに。

何となく、気分を害されたような気がして、美言は静かに本を閉じた。晴れやかな気分が、一気に、冷たい水の中。

恵みの雨だとは、わかつていた。美言自身、雨は決して、嫌いではなかった。しかし、ただ今日はどうしてか、この雨が、気に障つてならなかった。

こほんっ、とルーカスが咳込んだ。

「先生、大丈夫？」

「……いつもの、ことですよ」

苦笑するルーカスの言う通り、彼の体調は、天気によって左右さ

れ易いのだ。元々丈夫ではない体は、天気が悪くなればなるほど、不調を訴えやすくなる傾向がある。

いつもの、こと。

わかつてはいても、

「先生、寝てた方がいんじゃない？ 何かあつてからじゃあ、辛いだろうし……」

「いいえ、大丈夫ですよ。安心してください。もし駄目そうでしたら、きちんと、寝ることにしますから」

「うん……」

絶対、約束してよ。

付け加えてから、美言は大きく、溜息を吐く。
なんでだろ。

どうして美言、今日はこんなにユウウツな気分なんだろ……。

「雨、強くなりそうですね」

「……先生、辛くなったら、」

「わかってますって」

ルーカスは何と無く、自分の体の状態から、今後の天気の方方を察していた。美言から釘を刺されかけたところで、椅子の背凭れに、深く頭を預ける。

「大雨になりそうです……」

疲れたように、瞳を閉ざす。

美言は、師のその様子を横目に、惹き付けられるかのようにして、呼ばれるかのようにして、窓の外へと視線を滑らせた。

水が伝う、透明な硝子。軽い音をたてて、部屋の目の前で水が、いくつもいくつも弾け跳んでいた。

その数が、段々増えてゆく。音が、次第に強くなる。

……心が、ざわつく。

どうしてか、嫌な予感が、する。

「先生、」

「何ですか？」

どうしてこんなに美言、そわそわしなくちゃいけないの？
心が、落ち着かない。……おかしいよ、こんなの。絶対に、変だよ。

不意に、書斎の棚の上に置かれている花瓶に、目がついた。

コスモスの、無い花瓶。あの日、あの場所から美言が持ってきたあの紅いコスモスは、既に花弁を散らせ、先日、土に戻されたばかりであった。

けれど。

……ねえ、と。

何かによつて、呼ばれているような気がした。

「先生、」

「どうしたんですか……？」

コスモスの、残り香。そんなものがあるはずはないというのにも関わらず、美言は甘い香りを、不安一杯に吸い込んだ。

何、これ。

その瞬間、呼ばれている、という確信が強くなる。

誰から？ あの、コスモスさんから？

どこに？ あの、コスモス畑に？

どうして、こんなことが？ って、それがわかれば、美言はこんなに、きつと、不安になつたり、してないはずなのに。

いや、まさか。呼ばれたとか、何だとか、まさか、

まさかそんなことが、あるはずは……、

「先生……、」

「美言？」

三度呼びかけられて、ルーカスはそつと体を起こした。

美言を、見つめる。胸の上に手を置き、俯く美言を、静かに、見つめる。

強まるばかりの雨音が、部屋の中を支配した。窓の外の景色が、水の霞によつて白くなる。

やがて。

「……行ってくる」

かたんつ、と、美言の座っていた椅子が音をたてた。途端、すつくと立ち上がった美言が、まるで何かを確信し、決意したかのような表情で、書斎の扉へと歩いて行く。

驚いて、ルーカスが眼を見開いた。

「行く、って、どこへ？」

「心配なの」

「心配？」

「うん。……あのね、すぐ、戻るからっ」

「ちよつと……美言っ?!」

ルーカスが立ち上がりかけた頃には、美言は既に、書斎から立去ってしまった。

リン……と、扉のベルの音が、甲高く部屋の中に響き渡る。

「美言……?」

その音も、次第に雨音へと、掻き消されていった。

第6章 - B

予感、的中。

何かが、あまりにもおかしすぎると思ったのだ。だから、美言は走っていた。どこへ　街外れの、あの森の方へと。

「やだ……ちよつとつ！　大丈夫っ?!」

美言はここまで、傘も差さずに、ワンピースが汚れることにも構わずに、水溜りの大きな石畳の上を、ぬかるみ始めた土の道を、全力で走って来ていた。その先で、まさかこのような光景に出会うことになるなどと、全く予測もしないままに。

「彩海君！」

「あんまり大声は……、」

出すなつて。頭に、響くからさ。

美言に抱えられた彩海は、薄い意識の中からぼんやりと言葉を紡ぎ出した。

言葉の最後が、声にならない。そのようなことにすら、気がついていなかった。

雨に打たれる森の中で美言が見つけたのは、絵を描くための道具一式と共に道の木陰に座り込む、彩海の姿であった。

我を忘れたかの如くにして彼に駆け寄った美言は、ゆっくりともたれかかってきた彩海を、しっかりと受けとめた。受けとめて、しかし、そこからどうすればいいのか、わからなくなる。

「しっ……しっかりしてっ、ねっ？　帰ろ……ね、彩海君ってばっ」
だが、彩海が立てないであろうことなど、一目でわかることであつた。

美言の姿を見て安堵したのか、彩海は瞳を閉ざし、大きく息を吐いた。しかし、その息は荒く、整う気配を見せなかった。

……熱？

彩海の額に手を置いた美言が、はっとする。

彩海が最近、風邪をひいていることは、美言としても知っていた。知っていたからこそ、

無理はしないでねって、前に会った時、あんなに言っておいたのに……！

あまりにも突然の雨に見舞われ、彩海としても、対応のしようが無かったであろう。結果として、水に濡れながら、びしょ濡れになりながら、キャンバスと画材道具とを木陰に運ぶはめになった。元々悪かった体調が、その最中に悪化してしまったと考えることは、決して難しいことではない。

「やだ……ねえってば！」

慌てる美言をさし置いて、彩海はただ、自分を包み込んでいる暖かさに信頼を置いて、ふわり、と、意識を手放した。

美言が彩海を揺すれども、その名前を呼ぼうとも、彼はもはや、こちらの世界に戻ってこようとはしなかった。

美言が、絶句する。

雨が、木々の葉の堤防を破り始める。

「彩海君っ、駄目だよ！ 起きてってばあ……ねえ！」

彩海はぐったりと力を失ったままで、小刻みに呼吸をするのみであつた。

美言がその手を、そっと取り上げる。

……やだよ……誰か、お願い。

思いながら、ふと、馬鹿みたいなことを思い出す。

そつえば、美言は先生の弟子なんだよ。ねえ、美言は、魔法使いなんだよ……？

魔法を忘れた、魔法使い。けれど、魔法使いは、魔法使いだ。自分は、誰かのためになれる魔法使いを目指す、魔法使いの、弟子。だったら魔法が使って、当然ではないか。

僕の最終目標は父さん、さ。遠い目標だとは、わかってるけどね。

誰かに笑っていてほしいから。幸せになってほしいから。そう言

って、キャンバスに向かい続けていた、彩海。

美言だって、それは同じだよ。美言だって、……君の笑顔を、見ていたいんだもん。確かに、あんまり表情にはしてくれないけど。

でも、だから。

思い出さなくちゃ。

こんなんじゃ、このままでいちゃ、駄目じゃない、美言。そんなんじゃ、先生みたいになれるはずがないよ……だから。

彩海の手を握る力を、強くする。助けたい人が、ここにいるのだねえ。

美言には、そういう力があるんだよ。美言には、今、彩海君を助けることのできる力が、あるはずなの。だって、そうでしょ？　だって美言は、この前まで。空だって飛べたし、物だって直せたの。魔法とはまさしくアイデア勝負なんですよ、と、いつぞやにルーカスがそう言って笑っていたことを思い出す。自分の周囲にある”モノ”をどのように変化させるのか。変化させる方法は”数式”によって定められていたとしても、何をどのように変化させ、利用するのは、魔法使いが自由に決めることなのだ。

どうしたって、美言は、彩海君を助けたいの。だって、美言は先生のような魔法使いになりたいの。誰かを助けることのできるような、魔法使いに。

それに。

だって、彩海君は、

「やだ……彩海君！　しっかりしてよ、ねえ！」

彩海君は美言にとって、

美言にとって……、

「彩海君！　彩海君ってば！」

美言にとって、こんなにも大切な人なのに……！

失いたくない、と、ただ純粹にそう思う。あの時触れたぬくもりも、もらった微笑みも、いつまでも近くで感じていたい、そう思

う。

もしこのまま、彩海君がいなくなっちゃったら？

美言の傍から、いなくなっちゃったら？

大袈裟かも知れないけれど、と。心のどこかでは冷静にそう理解していても、考えれば考えるほど、腕に抱える暖かさが、冷たく遠ざかってゆくかのように感じられた。彼は今、こんなにも自分の近くににいるというのにも関わらず、どうしてか、その実感が湧いて来ない。

雨が、二人の間にも落ち始める。水は容赦無く、ぬくもりを流し落としてゆく。

怖いよ。

心の中で、美言が呟く。

美言はね、すごく、怖いよ……、彩海君……。

天の涙は地を轟音で轟かせ、世界を美言から霞ませてしまう。

鳥達の鳴き声も、風の音すらも聞えない森の中。美言の愛する光景は、ここには微塵も存在してはいなかった。

水の轟く、音だけがする。

ただ、それでも。

荒くも細い彩海の息遣いだけが、美言の耳に、はつきりと聴こえてくる。

「彩海君……」

彩海君。

瞳を閉ざしたまま、彩海は美言の言葉に応じる気配を見せなかった。

美言は空を見上げる。今にも落ちてきそうなほど垂れ下がった木々の葉の間から、雨雲色の空が、ちらりほらりと揺れて見える。

まだまだ雨は、止みそうになかった。世界から熱が、奪われてゆく。

美言は再び、彩海へと視線を戻した。

……ねえ、誰か。お願い、応えて。

どうやったら美言は、彩海君のことを、助けることができるの？
誰か教えてよ、と、祈るような気持ちで、美言は心当たる人々を
呼ぶ。

パパ、ママ、先生。司教様……、それに、美言君の、お母さんも、
お父さんも。

美言は一体、どうすればいいの？ このままだと彩海君、本当に
死んじゃうかも知れないんだよ……ねえ、そんなの嫌だよ、美
言、そんなの絶対にイヤ……。

美言の手が、彩海の頬へと触れる。

お願い、彩海君。ここから、いなくならないで。美言の傍から、
いなくなっちゃあイヤ。
だって。

「彩海君……美言はね、」

今までどうしてか、ずっと言うに言えなかった。だけど、

「美言はね、彩海君のこと、大好きだから。だから、彩海君……、」
こんなの、美言の我儘かも知れないけど。
でも、どうか。お願い、どうか、

「美言の傍から、いなくならないでよ……」
そうして。

降り注ぐ、雨粒の中に。

その時、一筋の暖かい想いが紛れ込んだ。

美言の頬を、涙が伝う。

泣き出した美言の心は、美言によって握られた彩海の手の上に、
音もたてずに溶け込んだ。
そうして。

第6章・C

青い空。白い雲。揺れる秋の桜。微笑みあう、美言と彩海。

そこには、いつもの光景があった。森の奥の、コスモス畑。

全てはまるで、あの雨など無かったかのようにして、穏やかさを取り戻していた。それは、このコスモス畑にしても、美言にしても、彩海にしても同じことであった。

あの事件の後。

彩海は教会で療養し、今やすっかり元気になっていた。体調が万全のものとなってからは、またいつものように、この場所へと、絵を描きに来ている。尤も、そのようなことをしていられるのも、残り数日となってしまうているのだが。

美言は美言で、あの事件を切欠に再び魔法の力を取り戻し、連日一所懸命、その練習に励んでいた、その傍ら、勿論こうして、彩海の所に来ることも忘れない。尤も、そのようなことをしていられるのも、残り数日となってしまうているのだが。

ちなみに、彩海も知らない事件の顛末は、こうであった。美言がどのように、彩海を助けたのか。彼女は頭上で雨を蒸発させ、雨が止むまで、二人を包む空気を、ほんのりと暖かい温度に保っていたのだ。その後は、二人を探しに来てくれた司教とルーカスとが、二人を保護してくれた。

時間が、刻一刻と過去つてゆく。その分、冬の香りが、そろそろりと近くなる。

それでも二人は、相変わらずであった。相変わらず、残りの時を、いつものように過ごすばかりであった。

ただ。

少しだけ、いつもと違うことが起こっていたことも、事実ではあった。

事は、美言がいつものように、彩海が絵を描いている姿を、後ろ

から眺めていた時に、訪れた。

「コスモスってね、実はとっても強い花なんだよ。たとえば台風なんか来ても、茎の途中から根を出して、また立ち上がったちゃうの」
だからあれだけの雨の後なのに、皆こうして、元気に咲いてるんだよ。ね、皆ほら、寄り添いあつてる。

美言は、付け加えて、微笑んで、

「ねーえ、彩海君」

唐突に、呼びかける。

「ん？」

彩海が、美言の方を振り返る。

その先では、美言が満面の笑みを浮かべて、彩海のことをじっと見つめていた。

「えへへ……」

「何だよ、気持ち悪いな」

「あのね、ふと思ったの。大丈夫だよ。美言ね、寂しくなんか、ないもん」

「はあ？」

「美言、寂しくなんか、ないよ」

美言は繰り返して、彩海の大好きなその笑顔を深くした。

コスモスの、花が揺れる。

甘い香りが、風に舞い散る。

秋の気配が、二人の周りに咲き乱れる

彩海の視線が、キャン

バスへと戻された。

美言の視線も、キャンバスの上に留まる。

彩海が、筆とパレットとを手を取った。

パレットが、ほんのりと色付けられる。まずはまた、紅色のコスモスが、キャンバスの上に花を咲かせた。

コスモスは、ようやく蒼く輝いた空へと向かって、すつくと背を伸ばす。その世界に、もう間も無く太陽が照り輝くということを、信じるかのようにして。

真剣な、彩海の横顔。

美言の手が、ふと、彩海の肩に伸びかける。

美言の心が、ときり、と跳ねる。

このまま、素直に。

彩海に触れてしまうことが、できたのならば。

そういえばなぜか、美言は今日までずっと、そう思い続けてきたけれど。

どうしてか美言、いつもいつも、……先生にはそうすることができのに、彩海君には、そうすることができなくて……、

「美言」

びくり、と。

伸ばされかけたその手が、彩海の肩の前で動きを止めた。名前を呼ばれた少女が、ゆっくりとその手を下ろす。

一瞬、後悔した美言ではあったが、

「……なあに？」

平穩を装って、返事をした。

筆とパレットとを横に置き、彩海が再び、美言を振り返る。

彩海が、一つ息を吸う。

「来年も、来ようかな」

唐突な言葉に、美言がきょとん、と瞬きを一つする。

来年も？

「大伯父のヤツも、ルーカスのヤツも、面白い人だったし」

「……うん、

「それに、」

それに？

「……月代は、君が言った通り、とっても良い街だったし」
うん。

「何せここには、君がいるからね」

「……美言が？」

美言が、いるから？

思わず、声に出して問うてしまった。そんなつもりは無かったというのにも関わらず、思うより先に、言葉の方が飛び出してしまっていた。

そのまま二人とも、黙り込んでしまった。

穏やかな、沈黙の花霞。

やがて。

「そこに、立つて」

「……へ？」

「いいから、そこに、立つて」

キャンバスの向うを指差し、彩海が、断ることは許さないよと言わんばかりに、美言を促した。

あまりにも唐突過ぎる展開に、美言には、何がなんだかわからなかった。

「立つの？」

「そう、立つの」

ひらり、とスカートの裾を持ち上げた美言が、軽い足取りでキャンバスの前に立つ。

二人が、向かい合う。

「もう少し、離れて……そう、その辺りが、良いかな」

彩海に指図されるままに、美言は、秋桜の間を縫うようにして歩む。

「止まって」

そつと、花を踏まないように気をつけながら、立ち止まった美言が彩海に問いかける。

「ねえ、どうしたの？ 急に」

「君が、いい」

「どういう、こと？」

「君がここにいれば、寂しくないような気がする」

「寂しく、ない？」

「一番の、花を咲かせなくちゃと思ってね」

言っただけ言っと、彩海はテーブルの上から、鉛筆を一本取り上げた。

本当であれば、色を着け始めた絵に再び下書きをするなどと、あまりあつてはならないことであるような気もするのだが。

でも、仕方が無い。

そうしたいと、思ったのだ。この絵に、一番の花を咲かせたい。

まだ、色付いていないコスモスの咲き乱れるキャンバスの一画に、彩海が真っ直ぐな線を、一本描き込む。

「ねえ、彩海君」

「黙って。君ももう子供じゃあないんだから、じっとしていることくらい、できるよね？」

「ねー、もしかして彩海君は、美言にモデルになってくれ、って言うてるの？」

少し楽しそうに問いかけられ、

「黙って」

「……相変わらずそういうトコ、愛想悪いよね、彩海君はさ」

キャンバスに線を入れ始めた彩海の言葉に、美言がぶう、と頬を膨らませる。

だが。

「美言」

「なあにー」

相変わらず不機嫌そうに口を尖らせている美言へと、

「笑って」

彩海が、唐突な注文をつける。

「は？」

「だから、笑って、って言ったんだよ」

そりゃあ、花の蕾も、美しいけど。でも、折角の一番の花には、やっぱり咲いてもらわなくちゃあ、駄目だろう？

口にはしなかったが、心の中でそう続けた。

折角なのだ。

どうせなら、美言の笑顔を、この絵の中に描き込んでおきたい。そうすれば、きつとこの絵ももっと満足のいく出来になるだろうし　君は本当にお喋りで、よく笑うから。そんな君になら、この絵の中からでも、見る人に幸せを分けてあげることができそうで、と、思ってた。

それに僕だって、君のことを、嫌でも覚えていなくちゃあならなくなるだろう？

彩海の言葉を受け、美言は空を見上げて、うーん、と小さく息を吐いた。

それから、何かを吹っ切るかのようにして、彩海を見遣る。

……よしっ。言いたいことは、今のうちに言っておかなくちゃっ。

「ねえ、美言はね、彩海君のこと、」

「全く、君はよく喋るなあ……相変わらず」

「人の話は最後まで聞いてよ！　全くもう！」

折角美言ったら、頑張ろうと思ったのに……！

何だかまた言えなくなってきた……と、胸を押さえて息を吐く美言。

その耳に。

「好きだよ」

囁くような呟きが聞こえて来たのは、美言が決意してもう一度口を開こうとしていた時のことであつた。

美言の視線が、跳ね上がる。

その瞳が、彩海を真正面から見据える。

彩海は相変わらず、キャンバスの上に鉛筆を滑らせていた。キャンバスの上に目を留めて、その世界に、入り込んでしまっている。

しかし先ほどの声音は、紛れもなく、彩海の声であつた。遅ればせ確信した美言の動きが、不意にぴたり、と止まる。

「……へ？」

「僕は君のことが、好きだって、言ったんだよ。だからほら、黙って、……笑って」

彩海は、一瞬だけ美言に視線を投げかけると、さも無愛想に、面倒臭そうに、
を装って、再び自分の描くコスモス畑へと意識を集中させた。

一番の、花。

このコスモス畑に咲く、一番美しい、香しい花。

「えへへ……っ」

その花は、先ほども少しだけ、赤い色を強くする。彼女は、本当に、心の底から幸せそうな笑顔を浮かべると、ゆるく俯いて、上目遣いに彩海を見上げた。

先、越されちゃったね。

ずっと美言、彩海君に、そうやって言おう言おうって、思ってたのに。

「……ねーえ、」

「だから、黙ってるって」

「その前に、一つだけっ！」

美言は精一杯の勇気で、彩海の視線を絡めると、

「大好きだよっ」

少し恥ずかしそうに、けれども、満面の笑顔で言葉を続ける。

「美言は彩海君のこと、だーい好き、だよっ！……ねえ、だから、」
そう、だから。

大好きな人には、美言の大好きな場所を、案内してあげたいから。それに、大好きな人と、いつまでも離れ離れになるのは、とっても辛いから。

「教えてあげるねっ、月代の、秘密をたーくさん。季節の風景とか、色んな場所とかっ。そうしたら、彩海君はまた絵を描きに来れるでしょ？ 月代は、とっても綺麗な場所だから！」

それにね。

「それにそうしたら、美言は彩海君に、また沢山、会えるでしょ？」
今にも抱きついてきそうな、屈託の無い笑顔を向けられた彩海の顔に、

「僕も、そうしたいな」
知らず、珍しく素直な微笑が浮かんでいた。

エピソード

荷物を抱えた彩海を、司教が促すかのようにして、車へと乗せた。彩海に続いて、美言が司教から背を押される。その隣にルーカスが押し込まれた。

司教は車のドアを閉めると、自らは助手席に乗り込んでシートベルトを締める。

今日の司教は、いつもの司教服ではなく、しっかりとした着こなしの私服を身に纏っていた。

それが、今日がいつもの日とは違う合図。

美言は隣に座る彩海の暖かさを空気越しに感じながら、車が走り出すのと同時に、深く息を吐いた。

そうして。

司教の教会に所属する信徒に、車を出してもらって、数時間。

昔ながらの異人街を抜け、その下にある町を抜け。海に向かって下り、アスファルトの整然と敷かれた、あの高台からよく見えていた都会に出る。

都会、と言っても。東京からは、程遠い場所。司教曰く、

こついうのをベッドタウンって言んですよ、……だなんて。

「……美言、こんな大きいマンション、久しぶりに見たような気がする」

彩海君は、これから遠い世界に行っちゃうんだね、と、俯いて美言は、その言葉を心の中にしまい込んだ。

車の窓の外で、景色が静かに、流れて行く。

月代を出てからというもの、車内は比較的、静かな雰囲気にかまわれていた。

古びた駅のホームに、まばらな人影が、ほのかに、寂し気で。

プラスチック製の鉄道プリペイドカードを手に遊ばせながら、彩海はどこか遠くを見つめるかのように、線路の向こう側へと視線を巡らせていた。

美言も美言で、そんな彩海を見遣ったままで、何も言おうとはしなかった。

鳥達の鳴き声が、涼しく響き渡る。

一ヶ月ほど前、彩海がここに着たばかりの頃はまだ青かった線路向うの木々も、今やその色を赤に黄色にと変えて、久しいようであった。

やがて。

四人の沈黙を破ったのは、何の前触れもなくホームに響き渡った、どこか無機質なアナウンスであった。

間も無く……、番線に……、各駅停車……、

「君も、たまに遊びにおいでよ」

線路の向うのとある一点から視線を逸らさぬままで、彩海が美言へと言葉のみを向ける。

「……うん」

僕の家住所は、大叔父が知ってるからさ、と、ぽつり、と付け加える。

「東京も、良い場所だよ」

彩海が一瞬、足下へと視線を投げかけた。

花言葉、ね？ 紅いコスモスの花言葉は、愛情、とか、調和、とか。

ふと、そんな、出会ったばかりの頃の美言の言葉を思い出していた。屈託の無い笑顔を咲かせる、甘い香りの小さな少女。彼女と出会ったのは、そういうえばもう、いや、たったの、一ヶ月ほど前になるのか。

線路の向うに咲いていたのは、紅いコスモスであった。……もう一度線路の向うを見遣って、再び視線を落とす。

危ないですから……、白線の内側まで……、

流れるアナウンスは、二人の事情も、気持ちも知るはず無く、ホームに淡々と音を響かせる。

お待ちください……。番線に……、

更にもう一度繰り返されたアナウンスの終わり。彩海につられて、美言も俯いた。

司教の目に、遠くから急いで近づいてくる、電車の姿が見え始める。

線路に、車輪の擦れる音が伝わって来る。

「さあ……、彩海」

「うん」

司教が、彩海の肩を軽く叩いて、彼を乗車位置まで促した。

「彩海。帰り方は、わかつているね。次の駅で急行に乗り換えて、」
「僕ももう子供じゃあないんだから、大叔父。わかつてる……きちん」と帰れるから」

彩海の声を、勢いよくホームに進入してきた電車の轟音がかき消した。

瞬間、吹き乱れた風に、そんな二人の姿を遠巻きに見つめていた美言が、一瞬瞳を細くする。

「こんな、こんなに速く、彩海君は、遠くに行っちゃうんだね。」

目の前の電車は速度を落としているはずなのに、溶けるように、ホームに滑り込んでくる。

「……と。」

「え……？」

「お行きなさい、と。」

囁かれたような気がして、美言は後ろを振り返った。

そこには、ルーカスの穏やかな笑顔があった。

「せん……、」

言いかけた美言の両肩を、ルーカスは軽い力で押しやった。

電車が、徐々に速度を落としてゆく。

ルーカスに背を押された美言が、戸惑い気味に、彩海へと近づい

て行く。

「美言？」

その影に気付いた彩海が、ゆっくりと、美言を振り返った。

美言が立ち止まる。

電車のブレーキの音が、きつくなる。

美言は、自分だけを見つめてくる彩海を目の前にして息を呑み、

「……あのね」

「うん」

「あのね……」

「うん」

きゅっと美言は、横にたらした手を握り締める。

電車のドアが、二人の前に現れて停まる。

……駄目だよ、美言。

頑張れ、美言。

今を逃したら、いつがあるっていうの……駄目だよ、ほら、頑張
って、頑張れ、美言。

今日は言おうと、そう決めていたのだ。今更その決意を変えてし
まっては、本も子もない。

あの日彩海は、コスモス畑で、自分より先に、大好きという言葉
をくれた。だから、

だから今度は、美言の番。美言の方から、行動に出なくっちゃ。

美言は、大きく深呼吸をすると、

「大好きだよ」

精一杯の勇気と言葉と共に、背伸びをして、彩海に甘く抱きつい
た。

コスモスの香りが、淡く散る。

秋の桜の香りを、彩海もきゅっと、抱きしめ返す。

電車のドアが、開く。

彩海はその香りを心に沢山吸い込んで、美言の頭をそっと撫でた。
彩海の胸から顔を上げた美言と、美言を見下ろした彩海との心が、

一瞬ではあれどゆっくりと絡み合う。

「……わかつてる」

珍しく素直に微笑んで、彩海は指先で美言の前髪を軽く退けると、彼女の額に、軽く唇を落とす。

彼女の手を捕り、その甲にも、一つ口付けをする。

駅員の笛を吹く音が、ホームに急いて響き渡った。

彩海が冷静なふりで美言を放し、けれども、照れたような微笑は消すことができないまま、急いで荷物を持ち上げると、ホームと電車の間を飛び越えた。

「あや……、」

美言の声を遮って、電車がドアの閉まる合図を鳴らす。そうして間もなく、薄いドアが、二人の間を完全に遮った。

司教が、微笑む。ルーカスも、微笑む。

そのぬくもりの余韻に呆然としていた美言が、慌てて手を挙げた。

「彩海君っ！」

電車の動きに合わせて歩き出し、ガラス越しにゆったりと手を振る彩海に、美言も精一杯手を振った。

しかし走り出した電車は速度をあげて、あっと言う間に美言達をホームにとり残してしまう。彩海だけを、この先へと、連れ去って。

「彩海君……、」

もう、追いつけなくて。

諦めた美言が、ホームの真ん中に立ち止まる。

彩海君。

また、会えるよね？ 約束したんだもん…… またすぐに、会えるよね。

だから、と。

美言はすつくと顔を上げて、遠く過ぎ行く電車の背を見送る。

ねえ、彩海君。

「……美言」

「えへ……、行っちゃったねっ」

美言は絶対、寂しくなんかないから……泣いたりなんか、しないよっ。

後ろから聞き慣れた声音でやわらかく名前を呼ばれ、満面の笑みを浮かべて、美言はそちらを振り返る。

美言の大好きな先生の笑顔が、そこにはあった。

「ねーえ、先生っ？ 彩海君だって、一人で帰れるくらいだもんね？ 美言今度、東京に遊びに行つてきちゃおうかなっ」

「おやおや、美言が都会に行きたがるだなんて、珍しいですね？」
都会嫌いの美言が、と、くすくすと笑いながら、ルーカスが言う。

「そんなに早く、彩海君に会いたいんですか？」

「当たり前でしょ……美言はね、彩海君のことが、だーい好きだからっ。あ、勿論、先生のこと、司教様のことも、だーい好き、だけれどねっ」

美言はルーカスの腕にしがみつくと、後から二人を追いかけてきた司教へも笑顔を向ける。

「彩海も、喜ぶと思いますよ」

口元を緩くして、司教が美言に応える。

…… 番線、お下がりください……、今度の 番線は通過電車です……。ご乗車できませんから……、

再びホームに、アナウンスが響き渡る。

もう間も無くして、電車がほとんど速度を落とすことなく、美言達三人の前を通り過ぎて行った。

吹き付けてきた風に、美言が宙に舞う髪を押さえた、その時。

「それにしても、あなたも本当に、大きく、なられたんですね」

気がつけば美言は、囁いたルーカスによって、大きな腕の中に抱き込まれていた。

F i n i s

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7631b/>

大魔法使いの弟子～夢寐の章

2010年10月8日14時40分発行